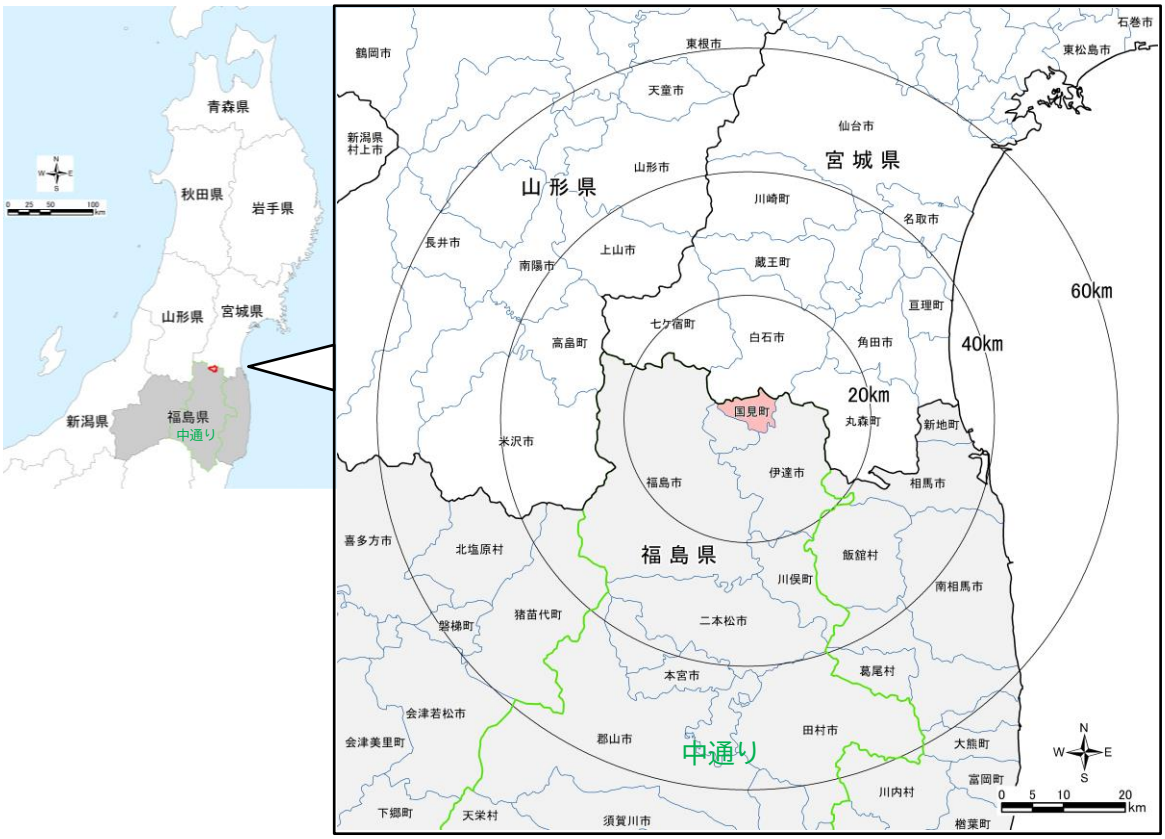
第１章　歴史的風致の背景

１．自然的環境

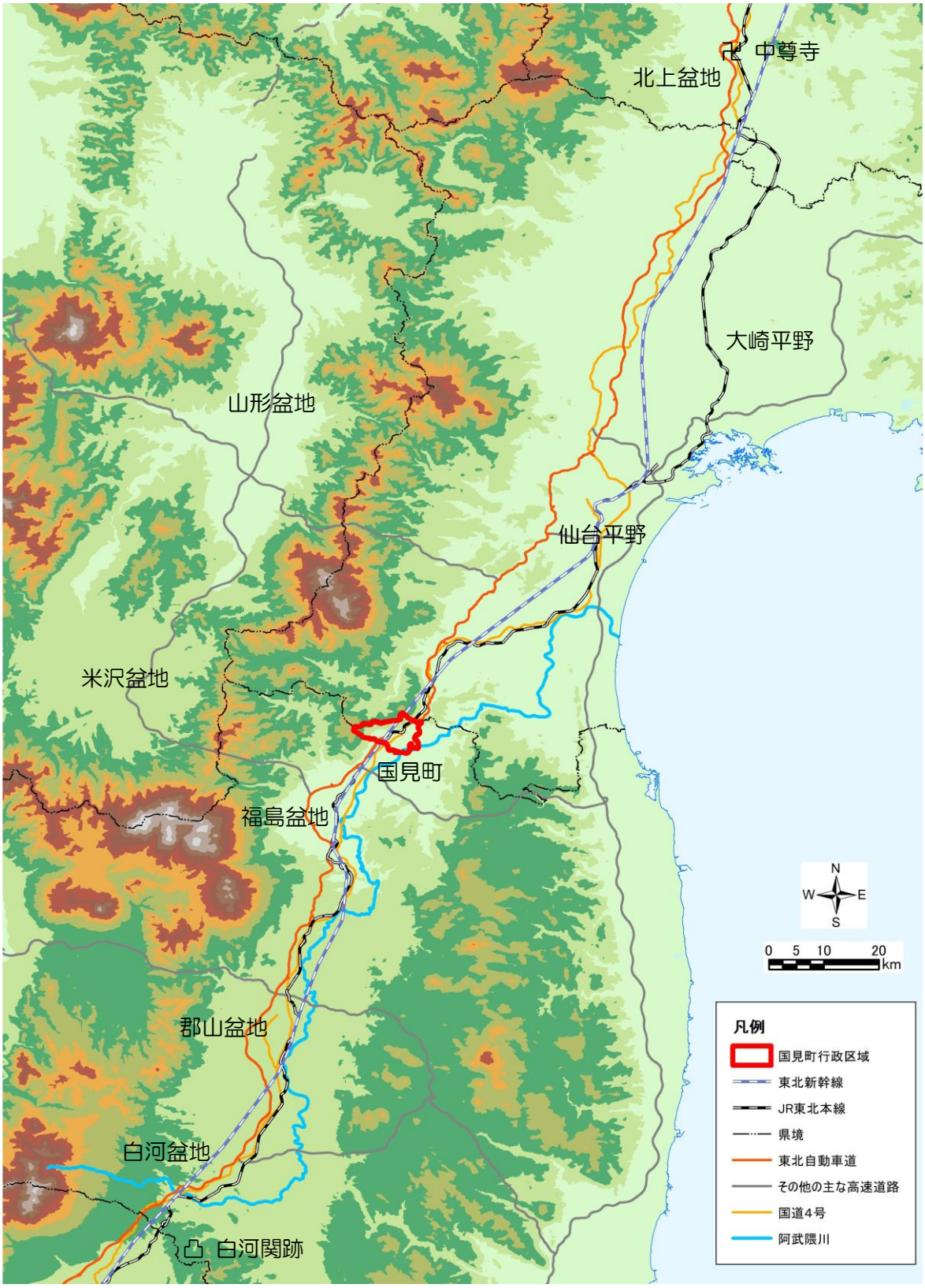
（１）位置

本町は、福島県の中通り地方の北端に位置し、町域は東西 9.5km、南北 7.4km で、面積は 37.95k ㎡となっている。北は宮城県白石市、東は阿武隈川（あぶくまがわ）を挟んで伊達市、南は桑折町（こおりまち）と隣接する。県都福島市までは約 16.5km の距離にあり、仙台市、山形市、郡山市にはそれぞれ 60km 圏内である。白河関と並び、陸奥国を貫く東山道（とうさんどう）（奥大道（おくだいどう））※の関門の地として重要な役割を果たしてきた。現在も東北新幹線、JR 東北本線、東北自動車道、国道４号などが縦走し、交通の要衝となっている。



■国見町の位置　(c) Esri Japan

※東山道（とうさんどう）（奥大道（おくだいどう））：東山道は古代律令制における岐阜県から青森県までを範囲とする行政区分およびその幹線道路。古代末から中世になると「奥大道」とも呼ばれた。福島県では中通り地方を縦貫した古代からの幹線路。



■白河関跡(白河市)・国見町・中尊寺(平泉町)の位置と主要道路

※「国土地理院基盤地図情報（数値標高モデル 10m メッシュ）」より作成。

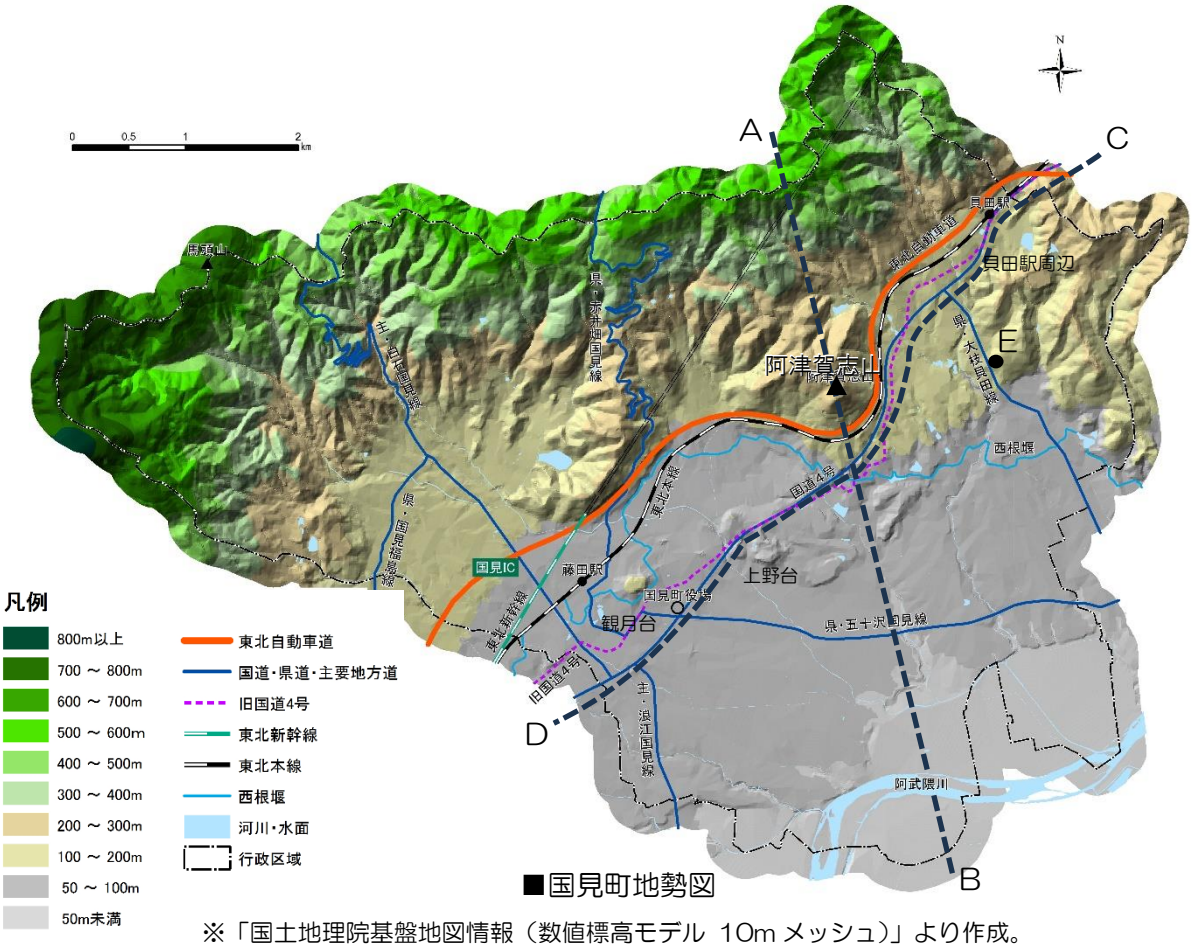
（２）地勢

本町は、奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれ阿武隈川水系により形成された福島盆地（信達盆地）の北縁部に位置し、白河から福島まで地形的に共通した盆地が連なる中通り地方の北端を形成している。

町の北部には標高600～700ｍの山々が連なり、宮城県境となる長い稜線が形成される。そこから標高200～300ｍ程度のやや低い尾根が南の平野部に向かって突出するように伸びる。阿津賀志山（標高289.4ｍ）もその一つとなる。

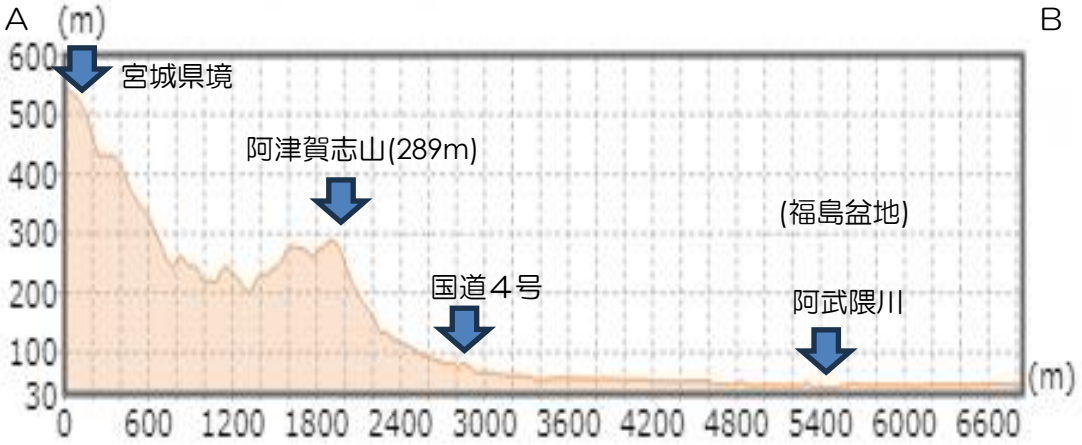
山地地形は、沢・小河川による谷筋から山麓台地・扇状地が広がる地形へ変わる。緩傾斜地の先には、標高50～70ｍの平坦な平野部が続き、比高差５～８ｍの段丘崖を経て阿武隈川氾濫原となる低地に至る。山麓の緩斜面地及び平坦面が町面積のおよそ半分を占め、水田や果樹地となっている。

このような山地と平野部の間には、阿津賀志山の南西からJR藤田駅付近まで、「上野台」「観月台」などの台地地形が断続的に続いている。また、貝田駅周辺には、山々に挟まれたわずかな平地が宮城県まで続きに街道が縦走している。これらは、河川による開析と地質・断層の影響を受け形成された地形である。

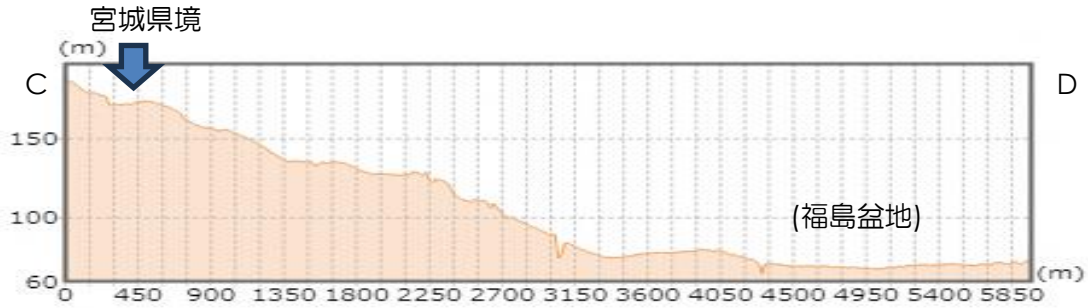


■国見町地勢図

※「国土地理院基盤地図情報（数値標高モデル 10m メッシュ）」より作成。



■標高差(南北方向 A-B断面)



■標高差(東西方向 C-D 断面)　※おおむね国道４号

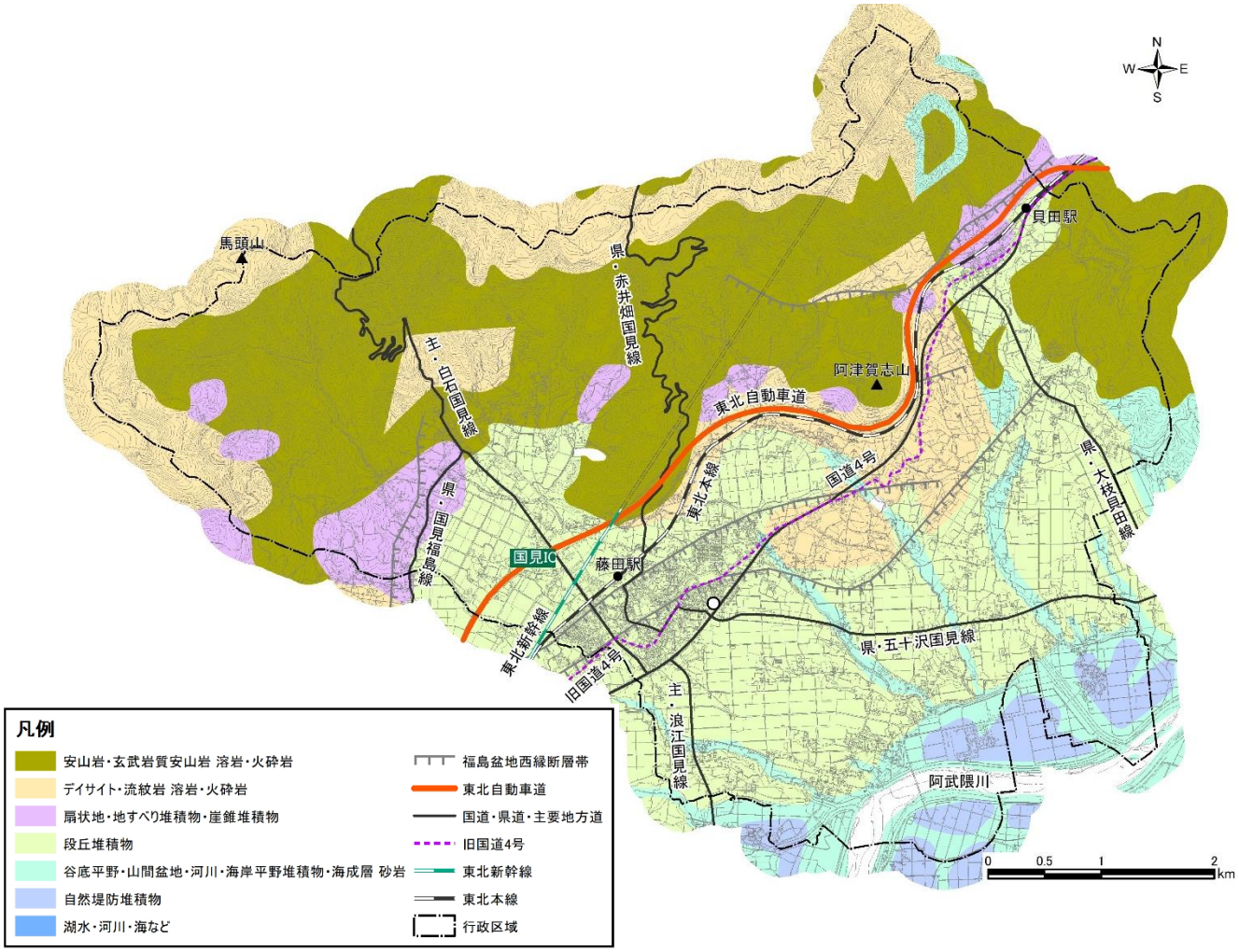
■国見町の山地・扇状地・平野部の地形(地勢図の E 地点付近から南西方向)

（３）地質

町の北西部にそびえる標高600～700ｍの山並みは、安山岩・玄武岩類の苦鉄質火山岩類で構成されている。その山麓斜面から平地への緩斜地では、堆積物が分厚い地層を形成する扇状地などと、珪長質火山岩類（デイサイト・流紋岩・凝灰岩類）が露出している箇所が存在する。

本町では、凝灰岩の露頭した場所から採石された石材を様々な用途に使用し、大正期から昭和期には「国見石」として流通した。現在も町内には、豊富な石材資源と石工技術を反映した石蔵が広く分布している。

また平野部では、阿武隈川及び同水系の小河川または山麓沿いに通る福島盆地西縁断層帯によって、堆積岩類と低位段丘・自然堤防が形成されている。堆積層には、風化した凝灰岩類に由来する粘土層が広く分布し、古代には土器の材料として使用され、現在も農業の恵みを支えている。



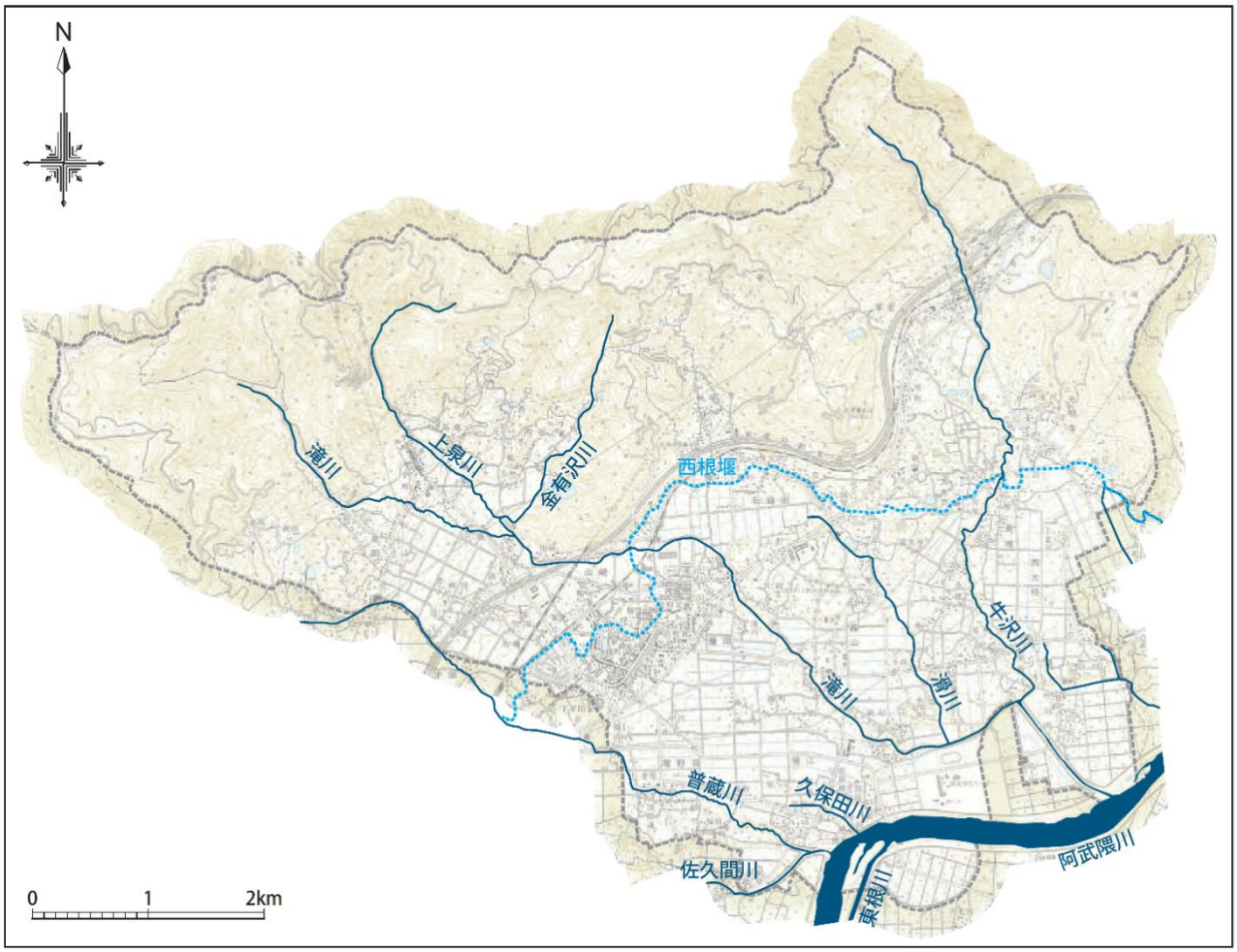
■国見町地質図　　※背景地図：「国土地理院基盤地図情報（基本項目）」
地質分類：20 万分の１日本シームレス地質図 V2（産総研地質調査総合センター）
活断層：「福島盆地西縁断層帯の長期評価について」（地震調査研究推進本部）

（４）水系

町内の南から東へ湾曲して流れる阿武隈川は、福島県・宮城県を流れる阿武隈川水系の本流で、一級河川である。流域には良質な田園地帯が広がるとともに、河岸段丘・自然堤防・湿地などの地形が形成されている。

町内を流れる支流には滝川（たきがわ）、上泉川（じょうせんがわ）、牛沢川（うしざわがわ）、普蔵川（ふぞうがわ）、佐久間川（さくまがわ）（以上一級河川）、滑川（なめりがわ）等がある。最も大きな支流は小坂地区に水源を有する滝川で、小坂地区で上泉川、森江野・西大枝地区の境界付近で滑川、西大枝地区で大木戸地区に水源を有する牛沢川が合流して、阿武隈川に注いでいる。普蔵川、佐久間川は桑折町の半田沼（はんだぬま）、藤倉（ふじくら）ダムを水源とするもので、流域のほとんどは桑折町だが、森江野地区で双方が合流して阿武隈川へと流れ込む。また、阿武隈川東岸側には伊達市から流れる東根川（ひがしねがわ）の合流地が本町内に位置する。

上記の自然水系のほか、町内には福島市北部から桑折町・国見町を経て伊達市に至る農業用水路の西根堰（にしねぜき）が流れる。江戸時代初期に掘削されたもので、現在も維持管理が行われ、本町の農業を支えている。



■水系図

（５）気候

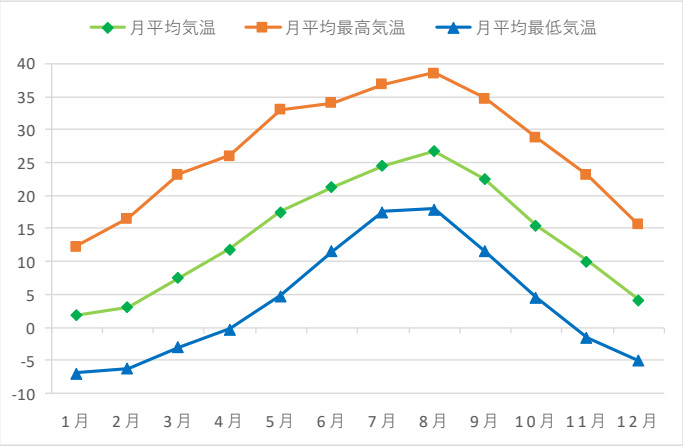
東西に広い福島県は、会津地方、中通り地方、浜通り地方と、気候も全く違う。会津地方は寒さが厳しく豪雪地帯となるが、浜通り地方は冬でも雪はあまり降らず比較的暖かい。中通り地方は南北に長いため、地域により寒暖差があり阿武隈川の西に位置する地区は雪が降りやすい。

本町は中通り地方の最北端に位置し、内陸性気候の特徴が混じった太平洋側気候である。年間平均気温は14.0℃で、７月から８月の夏期は、最高気温が35℃を超えて上がり、湿度も高く盆地特有の蒸し暑さが続く。一方で、12月から２月には氷点下７℃前後まで気温が下がり、降雪も中通り南部と比べると多いほうである。年間降雨量は、700㎜～1,000㎜で雨量は少ない。

年	平均気温(℃)	積算雨量(㎜)
令和２年(2020)	13.7	1013.5
令和３年(2021)	13.8	836
令和４年(2022)	13.6	746.5
令和５年(2023)	14.7	734.5
平均	14.0	832.6

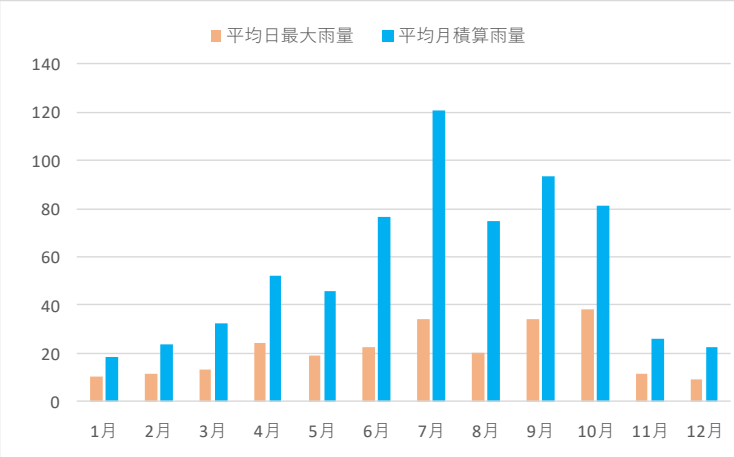
■年間平均気温・積算雨量　※

月	月平均気温	月平均最高気温	月平均最低気温
1月	1.9	12.3	-6.9
2月	3.1	16.6	-6.2
3月	7.6	23.2	-3
4月	11.9	26.1	-0.2
5月	17.6	33	4.8
6月	21.3	34.1	11.6
7月	24.5	36.9	17.6
8月	26.8	38.6	18
9月	22.5	34.8	11.6
10月	15.4	28.8	4.5
11月	10.1	23.1	-1.5
12月	4.2	15.6	-5



■月別平均気温・最高気温・最低気温(単位:℃)　※

月	平均日最大雨量	平均月積算雨量
1月	10.1	18.2
2月	11.3	23.7
3月	13.1	32.6
4月	24.5	52.3
5月	19	45.5
6月	22.5	76.6
7月	34.3	120.4
8月	20.1	74.7
9月	34	93.3
10月	38.2	81.2
11月	11.6	25.8
12月	9.1	22.7



■月別平均日最大降水量・平均積算雨量(単位:㎜)　※

※国見町気象観測システム　令和２～５年(2020～2023)度

【コラム：過去の自然災害】

国見町の地勢・地質・河川・気候の豊かな自然は、一方で自然災害ももたらしてきた。春頃の凍霜害や夏も含めた冷害は農作物への被害を発生させ、梅雨から秋にかけての台風・大雨は阿武隈川水系の氾濫を繰り返し起こしている。また、東北地方の太平洋沖を震源とする地震は、多くの建物に被害を発生させてきた。以下、『国見町地域防災計画』資料編から災害について記述する。

■昭和 53 年(1978) 6 月 12 日宮城県沖地震

本町の震度　震度５

本町の被害　人的被害　死者１名

軽傷者 22 名

建物被害　半壊 30 棟

一部損壊 291 棟

■倒壊した家屋(藤田)

■昭和 61 年(1986) 8 月 5 日集中豪雨災害（８・５水害）

本町の被害　住家被害 床上浸水 16 棟

床下浸水　４棟

非住家被害 20 棟

田畑冠水

62.9(田 22ha 畑 40.9ha)

■冠水した住宅(徳江)

■平成 10 年(1998) 8 月末豪雨(８月 27 日～31 日)

累積雨量　278mm　(24 時間最大雨量　173mm)

※町雨量計

本町の被害　住家被害　床上浸水　８棟、

床下浸水 17 棟、

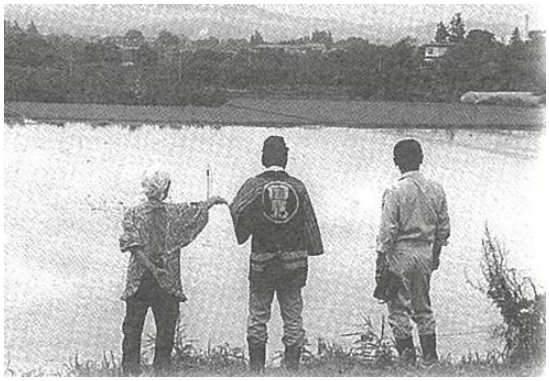
非住家被害 68 棟

農業被害 78.5 ha、

土砂崩れ 22 箇所、

河川被害７箇所

溜池越水３箇所



■冠水した農地(徳江)

■平成 23 年(2011) 3 月 11 日東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）

本町の震度　震度６強

本町の被害　人的被害

死者１名(仕事先での津波被害)

軽傷者 20 名

建物被害(住宅・物置等)

全壊 492 棟、半壊 732 棟

一部損壊 720 棟

公共土木施設被害

道路・橋梁・ため池・上下水道多数

■倒壊した家屋(藤田)

■令和元年(2019) 東日本台風等(10 月 11 日～13 日)

累積雨量　163mm　(24 時間最大雨量　134mm)

※町雨量計

本町の被害　建物被害(住家)

全壊８棟 大規模半壊３棟

半壊３棟 一部損壊５棟

■冠水状況(徳江)

■令和３年(2021)福島県沖地震

本町の震度　震度６強

本町の被害　人的被害　軽傷 12 名

建物被害(住宅・非住宅)

全壊 30 棟、大規模半壊 10 棟、

中規模半壊 15 棟、半壊 59 棟、

準半壊 486 棟、一部損壊 119 棟

■店舗内の被害状況(道の駅)

■令和４年(2022)福島県沖地震

本町の震度　震度６強

本町の被害　人的被害　重傷１名、軽傷 14 名

建物被害(住家・非住宅)

全壊 54 棟、大規模半壊 15 棟、

中規模半壊 111 棟、半壊 191 棟

準半壊 954 棟、一部損壊 200 棟

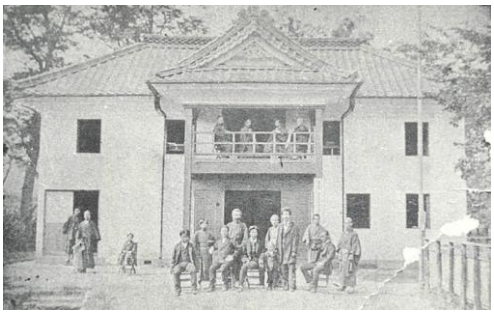
■新幹線高架橋・架線の被害

２．社会的環境

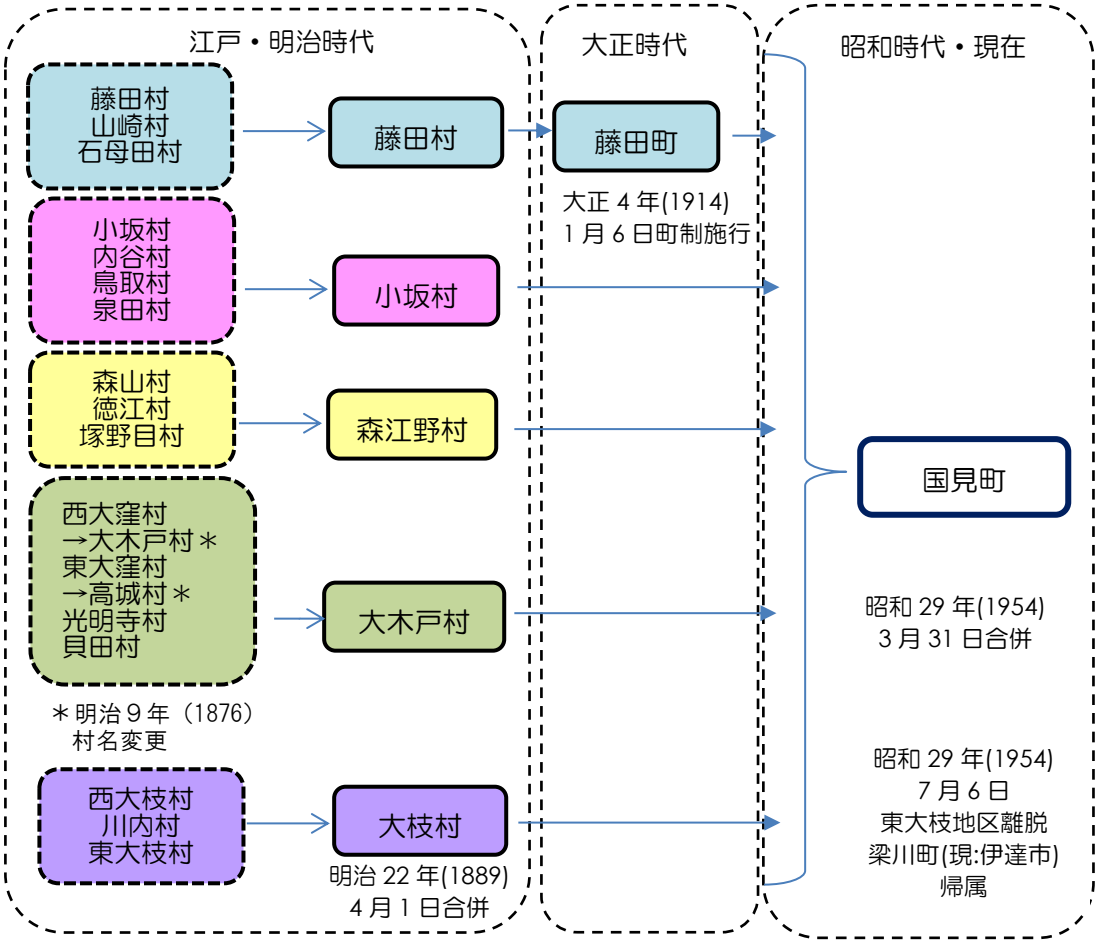
（１）町の沿革

本町内には、江戸時代に16の村々が存在した。それら農村のなかで、奥州街道の宿場町であった藤田村が在郷町として発展し、村々の中核的存在であった。明治時代になっても、奥州街道は一等道路「陸羽街道」（その後、国道６号）として引き続き幹線道路の役割を担い、藤田村の中核的役割は継続し、明治16年（1883）に12ヵ村の組戸長役場が藤田村に設置される。

明治22年（1889）には、市制町村制の施行に伴い16ヵ村から５ヵ村に村々が合併する。また、明治20年（1887）に鉄道（現在のJR東北本線）が開通し、明治35年（1902）には藤田駅が開業するなど近代化に伴い、大正４年（1915）には町制施行により「藤田町」が誕生する。



藤田村外十一ヵ村戸長役場



■国見町にいたる町・村の沿革

昭和25年(1950)には、藤田町・小坂村・森江野村の組合立中学校(県北中学校)ができ、また昭和27年(1952)には、前年に藤田町を含め設立された公立藤田病院組合が２町７ヵ村に組合加入町村を増やし、同年６月に病棟の完成により診療を開始する。このような状況から、町村合併のモデル地区と称されるようになり、昭和29年（1954）に県下に先駆けて、藤田町・小坂村・森江野村・大木戸村・大枝村の１町４村が合併、また同年旧大枝村の東大枝地区が梁川町(現：伊達市梁川町)に編入されたことによって、現在の「国見町」となった。

■昭和 29 年(1954)合併前の旧町村位置図

※背景地図：「国土地理院地理院地図（淡色地図）」

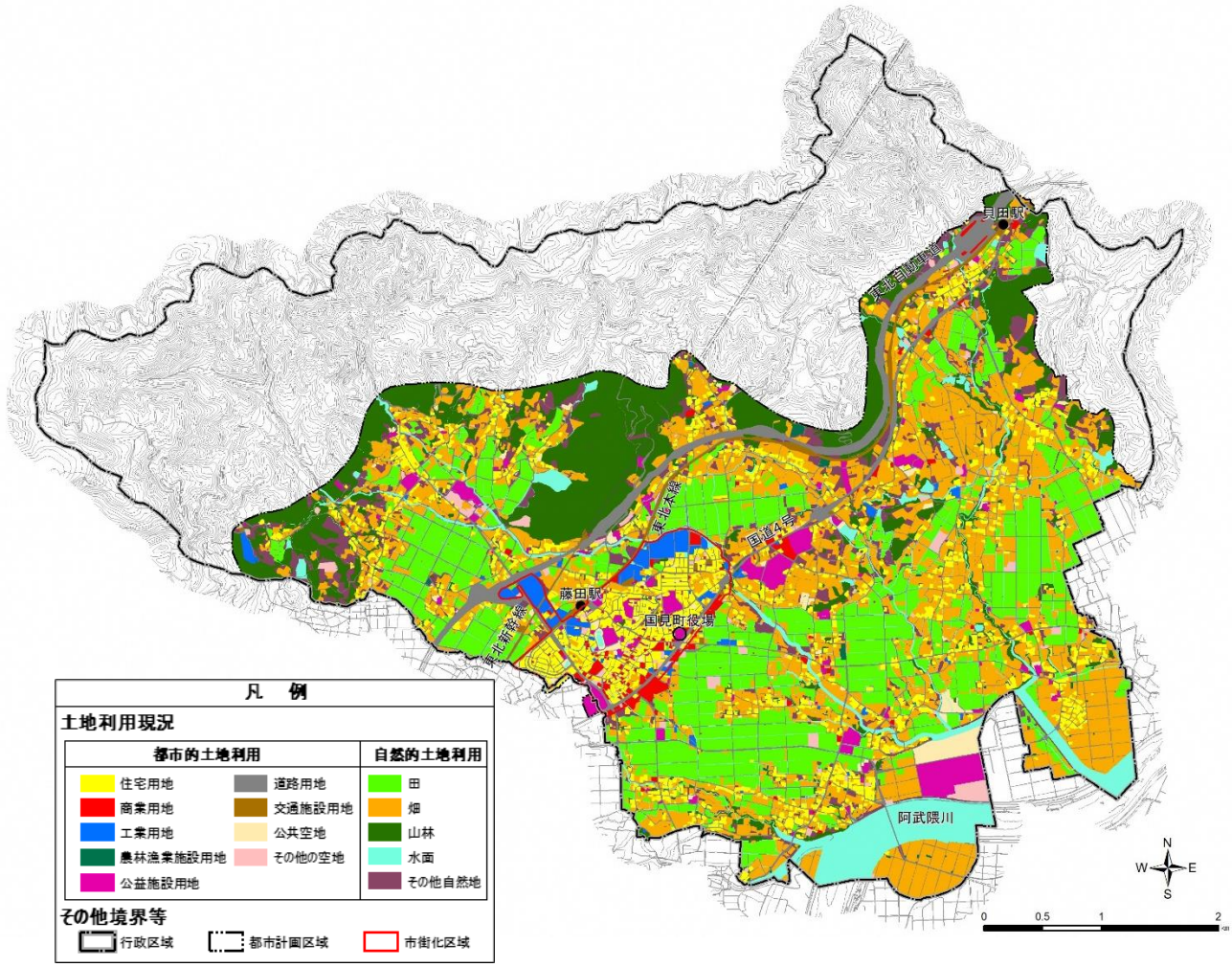
※平成26年度(2014)当時の地籍情報(属性データ)における旧村から境界を作成(飛地等は省略し抽象化)

【コラム：『国見町』の町名由来】

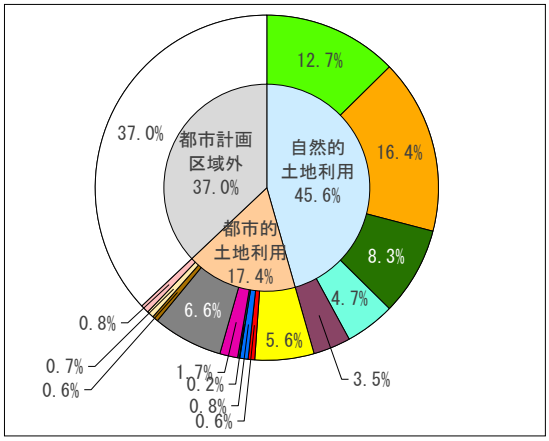
現在の阿津賀志山の周辺に「国見山」・「国見峠」・「国見」などの旧藤田町、旧森江野村、旧大木戸村にまたがる地名が存在する。『吾妻鏡』にも「*伊達郡阿津賀志山辺国見駅*」という記述があり、古くから使われてきた地名である。また、国見とは栄えゆく国を眺めるという意味も持つことから、昭和 29 年（1954）の町村合併の際、現在の町名に採用された。

（２）土地利用

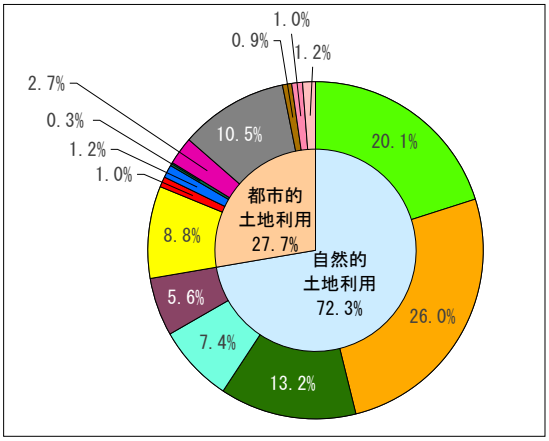
本町全域の 63%が県北都市計画区域に指定されており、区域区分に基づいた土地利用の誘導が行われている。住宅用地は全体の 5.6%で、藤田地区を中心とする市街化区域内に集中して分布しており、市街化区域以外では山林や田畑など自然的土地利用が大部分を占めている。



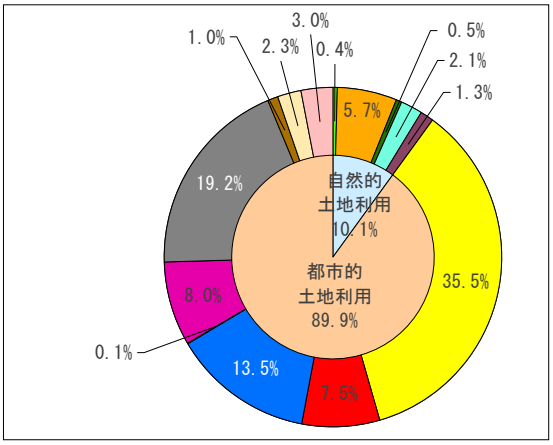
■土地利用状況（出典：令和５年(2023)都市計画基礎調査成果を加工）
※背景地図：「国土地理院基盤地図情報（基本項目）」



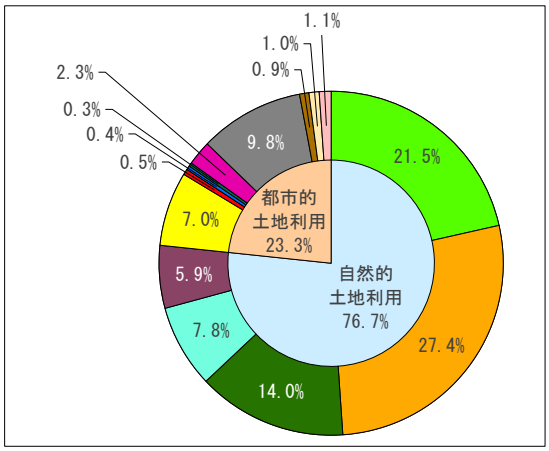
国見町（全域）



国見町（都市計画区域）



国見町（市街化区域）



国見町（市街化調整区域）

都市的土地利用	住宅用地	商業用地	工業用地	農林漁業施設用地	公益施設用地
	道路用地	交通施設用地	公共空地	その他の空地	
自然的土地利用	田	畑	山林	水面	その他自然地

■土地利用状況グラフ

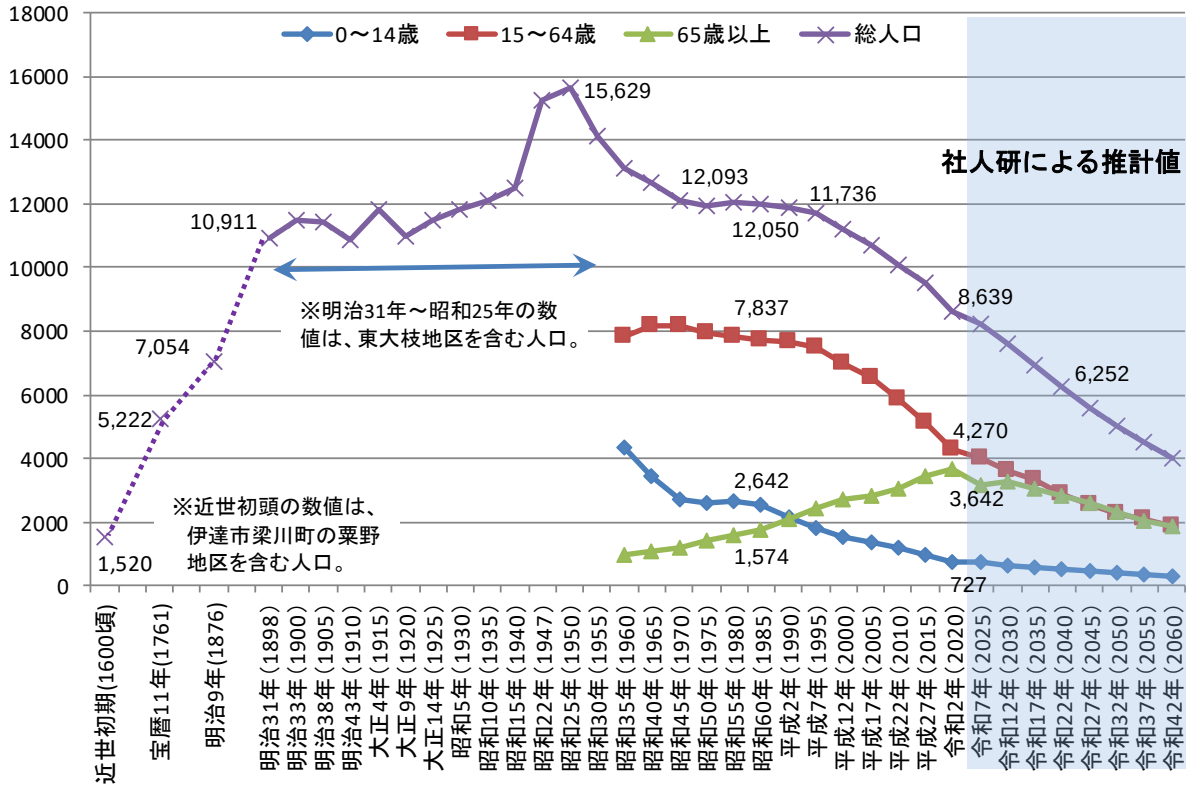
（３）人口

国見町の人口は、昭和 25 年(1950)の 15,629 人をピークに、高度経済成長期における都市部への一極集中の影響を受け、減少に転じている。その後、昭和 46 年(1971)からの第２次ベビーブーム以降、石油危機やバブル崩壊などのマイナス要因にもかかわらず、昭和 45 年(1970)から平成 7 年(1995)までは 12,000 人前後と横ばいで推移していたが、以降減少が続いている。本町の人口は、令和２年（2020）10 月 1 日時点で 8,639 人となっている。年齢別の人口推移では、昭和 55 年(1980)から令和２年(2020)までの 40 年間を比較すると、人口が 12,050 人から 8,639 人へと 3,411 人（30.5%）減少し、そのうち年少人口（０～14 歳）は 2,642 人から 727 人へと 1,915 人（72.5%）減少している。一方で、高齢者人口（65 歳以上）は 1,574 人から 3,642 人へと 2,068 人（131.4%）増加するとともに、高齢化率も 13.1%から 42.2%へと増加している。

国立社会保障・人口問題研究所による推計値をもとにした、国見町の「人口ビジョン」では、人口増加を実現することは困難とし、年あたり約120人程度減少し、令和22年(2040)には6,252人になると予測している。

このような人口の減少と急速な少子高齢化は、福祉や医療のみならず、生活文化の継承にも深刻な影響を及ぼすものと想定される。

■表　国見町総人口・年齢３区分人口の推移及び推計（※出典は次ページ、単位：人）



※出典データ

令和７年(2025)以降のデータは、国勢調査国立社会保障・人口問題研究所推計

大正９年(1920)から令和２年(2020)のデータは、「国勢調査」

明治 31 年(1898)～大正４年(1915)のデータは、「福島県統計書」

明治９年(1876)のデータは、当時の 16 ヵ村の「村誌」(明治 14 年(1881)編纂)

宝暦 11 年(1761)のデータは、「御巡検使案内」

近世初頭(1600 年頃)のデータは、「邑鑑」

■表　人口の推移（出典データ：国勢調査、単位：人、％）

区分	昭和 55 年 (1980)	平成２年 (1990)		平成 17 年 (2005)		平成 27 年 (2015)		令和２年 (2020)	
	実数	実数	増減率	実数	増減率	実数	増減率	実数	増減率
総数	12,050	11,888	△1.3	10,692	△10.1	9,512	△ 11.0	8,639	△9.2
0 歳～14 歳	2,642	2,167	△18.0	1,344	△38.0	953	△ 29.1	727	△23.7
15 歳～64 歳	7,834	7,656	△2.3	6,541	△14.6	5,117	△ 21.8	4,268	△16.6
うち 15 歳～ 29 歳(a)	2,277	2,008	△11.8	1,559	△22.4	1,069	△31.4	906	△15.2
65 歳以上(b)	1,574	2,065	31.2	2,807	35.9	3,425	22.0	3,642	6.3
(a)/総数 若年者比率	18.9	16.9	-	14.6	-	11.2	-	10.5	-
(b)/総数 高齢者比率	13.1	17.4	-	26.3	-	36.0	-	42.2	-

■表　人口の見通し（出典データ：国立社会保障・人口問題研究所推計、単位：人）

年　度	令和７年 (2025)	令和 12 年 (2030)	令和 17 年 (2035)	令和 22 年 (2040)
総　数	8,230	7,577	6,917	6,252
0～14 歳	741	647	577	524
15～64 歳	4,030	3,636	3,311	2,883
65 歳以上	3,159	3,294	3,029	2,845

【引用文献】国見町 2022 年『国見町過疎地域持続的発展計画』

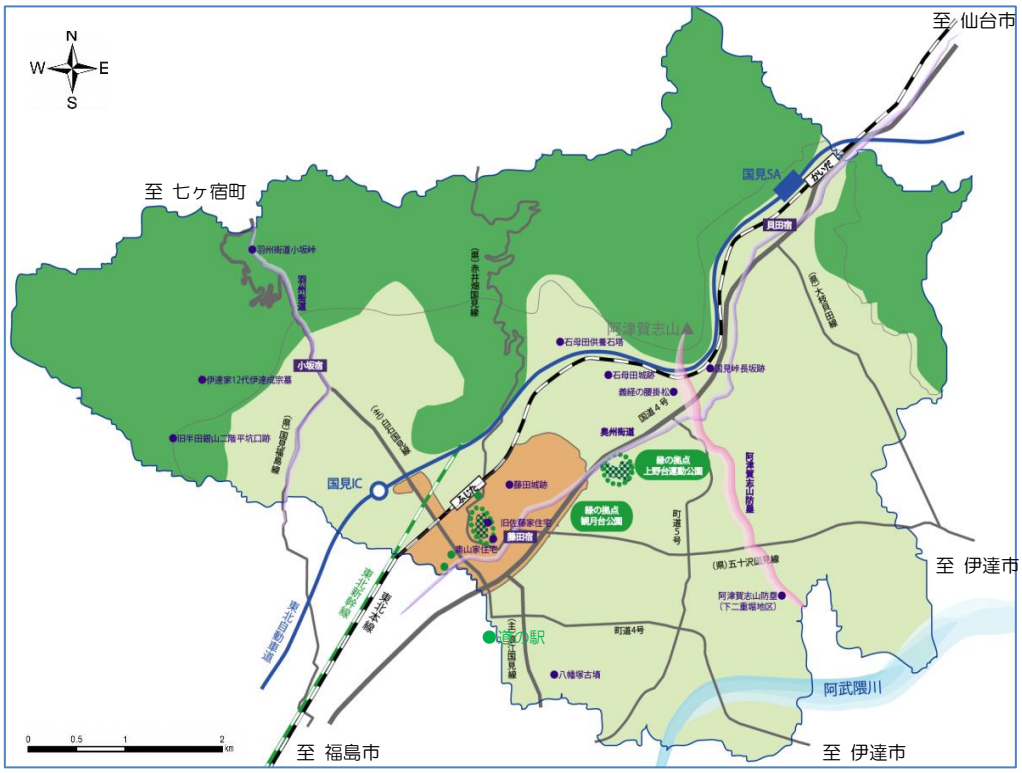
（４）交通

福島盆地の北縁部に位置する本町は、中世より仙台・米沢（日本海側）へ通じる陸上交通の要衝となってきた。現在も JR 東北本線、東北自動車道、国道４号が重なるように南北に縦断し、宮城県七ヶ宿町へ抜ける主要地方道白石国見線が東西に横断している。

国道は南北に国道４号が通り、福島県の県都福島市までは約 16.5km、車で 30 分程度、仙台市までは約 60km、車で１時間程度の道程である。また、東北自動車道には国見インターチェンジと国見サービスエリアが、国道４号には道の駅国見あつかしの郷が整備されている。これは本町の位置が、郡山市と仙台市及び福島市と白石市のほぼ中間に位置するためである。

県道は、主要地方道白石国見線、主要地方道浪江国見線、五十沢国見線、赤井畑国見線、大枝貝田線があり、米沢市まで約 48km 車で約１時間 30 分、浪江町には約 81km 車で約２時間 10 分の道程である。

鉄道は、JR 東北本線が南北に通り、藤田駅・貝田駅が存在する。藤田駅より福島市には約 18 分、仙台市・郡山市までは約１時間 10 分となっており、通勤・通学の重要な駅となっている。貝田駅は無人駅であるが、大木戸地区など周辺の人々が利用している。



■国見町の主な交通網

（５）産業

１）農業

本町の産業は、古くから農業が基幹産業である。主な平地には水田が広がる。ほとんどの農家が米の生産を行っており、現在の主な作付け銘柄はコシヒカリである。県下でも良質な米であるため、種もみとして生産する農家も多い。

また、福島県伊達地方の養蚕業は古来、副業として養蚕業が盛んに行われ、奈良・平安時代に始まったと伝えられている。その後、室町時代には伊達成宗（第12代当主）が将軍足利義政へ駿馬・黄金・太刀とともに絹（文字摺絹）を献上したとの記録が残る。江戸時代には、安永２～３年（1773～1774）に幕府より「蚕種本場」の称号が、伊達郡内の村々に独占して与えられ、町内では徳江村が入る。養蚕業は伊達郡の代表的な産業となり明治・大正と発展してきた。しかし、大正末に生糸価格の乱高下や化学繊維の開発による値段の下落によって収入が不安定になると、リスクがある養蚕業から新たな生業を求めるようになった。

新たな産業として果樹生産がある。干し柿製造は明治時代より製造され、皮を剥（む）いた渋柿を、寒風の中天日に干し、一種のドライフルーツとして食べられてきた。養蚕業をやめた養蚕住宅の二階部分は広く、風通しが良好な造りも幸いし、今までの養蚕業から干し柿作りに精を出すようになる。しかし、乾燥に伴い変色する外見から、販路を広げることが難しかった。それが、昭和初期以降硫黄燻蒸（いおうくんじょう）あんぽ柿（干し柿）製造方法が確立し、国見町でも盛んに製造されるようになった。これまでの干し柿とは違い、硫黄燻蒸をしたあんぽ柿（干し柿）は、ゼリーの様な食感であり、見た目も美しいあめ色で、商品価値が高く、全国へ出荷される産業へと発展した。

また、昭和40年代後半に柿の栽培のみでなく、桃栽培が始まった。本町の地質・気候は、桃栽培に適しており、多くの農家で桃を栽培するようになり、現在では全国９位、県内３位の出荷量を誇る。「あかつき」が主力品種である。

２）商工業

平成15年（2003）製造業の事業所数は29事業所であったが、令和３年（2021）には27事業所となった。卸売業も平成３年（1991）は23事業所だったのが、令和３年（2021）には８事業所に減少している。また、町内の商店も平成３年（1991）は167店だったのが、令和３年（2021）には92店にまで減少している。その主

な要因は、店主の高齢化や、大型のショッピングモールなどが近隣市町に出店したことによる来客数の減少などによるものである。

産業別＼年次	平成7年(1995)		平成12年(2000)		平成17年(2005)		平成22年(2010)		平成27年(2015)		令和2年(2020)	
	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)
総数	6,317	100	6,011	100	5,487	100	4,914	100	4,779	100	4,319	100
第1次産業	1,224	19.4	1,124	18.7	1,060	19.3	877	17.9	796	16.7	696	16.1
第2次産業	2,385	37.7	2,136	35.5	1,579	28.8	1,376	28	1,302	27.2	1,117	25.9
第3次産業	2,703	42.8	2,747	45.7	2,846	51.8	2,621	53.3	2,660	55.7	2,506	58
分類不能	5	0.1	4	0.1	2	0.1	40	0.8	21	0.4	0	0

■産業別就業者数（出典　国見町町勢要覧および国政調査より）

３）観光

本町は豊かな自然に囲まれ、全国でも有数の果物の産地である。春には、町内中心部にある観月台公園の桜が満開となり、また平地、丘陵地を問わず桃をはじめ果樹の花が咲き乱れ、奥羽山脈の緑のコントラストと相まって、町内一円は桃源郷となる。本町のシンボルである阿津賀志山頂上からは福島盆地が一望でき、眼下に広がる田園風景は、春を映す鏡のような水面、夏の緑、秋の黄金色へと日々変化する。９月23日は「くにみの日」として町全体が義経まつり等のイベント一色となり、源義経ゆかりのこの町は多くの観光客でにぎわう。

■観月台公園の桜

■桃の花

■阿津賀志山山頂からの眺望

■義経まつり

３．歴史的環境

（１）歴史

①原始

縄文土器が出現する以前、人類が主な道具として打製石器を使っていた時代を旧石器時代(約260万年前～15,000年前頃）と呼んでいる。日本列島では、3.5～４万年前には人類が住み始めたと考えられる。その頃の人々は、氷河期という環境の中で家を持たず、石や骨などから道具を作り、狩猟や植物を採取して移動しながら生活していた。

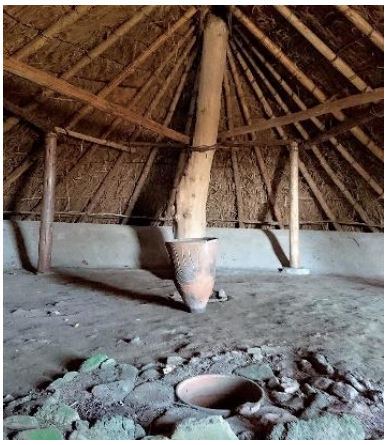
本町では、旧石器時代後期の遺跡として大字光明寺の滝沢遺跡（２万年前頃）が知られていて、狩猟や植物を刈るのに使うナイフ形石器を作るための石刃（せきじん）と呼ばれる素材が出土している。旧石器時代は石の性質を理解し、鋭利な刃部を作り出すことが得意だった。また、阿津賀志山防塁国道4号北側地区でも、旧石器時代に使われていたと思われる細石刃（さいせきじん）が出土しており、旧石器時代の営みが継続していたと考えられる。

縄文時代になると、新たに磨製石器や弓矢、土器などが発明された。この時代は、気候が温暖になったこともあり、食糧も移動せずに狩猟採取や栽培によって確保できるようになった。人々は土器を使用して食べ物を煮炊きするようになり、村（集落）を作って竪穴住居での定住生活を始めた。

本町の縄文時代の遺跡は、標高50～100mの洪積台地（こうせきだいち）上に分布し、32か所確認されている。早期～前期は、少量の遺物が散らばって出土している程度だが、中期（5,500年～4,500年前）になると規模の大きな遺跡が見られるようになる。中期の特徴的な遺構である石組複式炉を持つ住居跡は、国見町では岩淵遺跡（大字高城）・山田遺跡（大字光明寺）で確認さ

■滝沢遺跡で出土した石刃

■岩淵遺跡

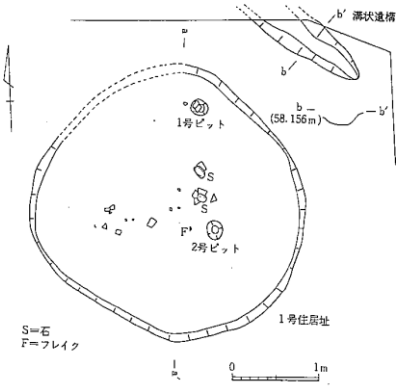


■岩淵遺跡の内部

■山田遺跡で出土した土器

れている。岩淵遺跡では、当時の人が暮らしていた竪穴住居を復元し、縄文時代の暮らしを感じることができる。後晩期（4,500年～2,300年前）の遺跡は、川原遺跡（大字小坂）・竹ノ内遺跡（大字西大枝）が知られ、埋甕（うめがめ）や石囲炉（いしがこいろ）が発見されている。

弥生時代になると、稲作が開始され、鉄器文化が徐々に伝わり、農耕を中心とする社会へと変化がおきる。しかし、当町における弥生時代の遺跡は少なく不明なものが多い。竪穴住居が発見された仏供田（ぶっくでん）遺跡（大字徳江）で集落跡が調査され、堰下（せきした）遺跡（大字泉田）で蛤刃石斧（はまぐりばせきふ）等が発見されている。



■仏供田（ぶっくでん）遺跡で発掘調査された竪穴住居跡(平面図)

■蛤刃石斧（はまぐりばせきふ）（堰下遺跡出土）

②古代

古墳時代になると、弥生時代に出現したエリート層の中から地域を支配するような首長が生まれ、奈良盆地において北部九州や吉備、出雲、大和などの地域の大首長を中心とした首長連合によって誕生したのがヤマト王権である。この時代は、首長たちのために築いた墳墓（古墳）が全国各地に造られたことから、古墳時代と名づけられた。古墳には前方後円墳・円墳・方墳などがあり、畿内の大型前方後円墳を頂点とした序列が定められていたと考えられている。

本町にも古墳が数多く残っており、５～７ 世紀にかけて造られた塚野目古墳群は町内最大の古墳群である。かつては、48基あったことから四十八塚と呼ばれていたが、現在確認することができるのは11基である。主墳の1号墳（国見八幡塚古墳）は、５世紀に築かれた前方後円墳で墳長71～66m が見込まれ、古墳時代中期においては

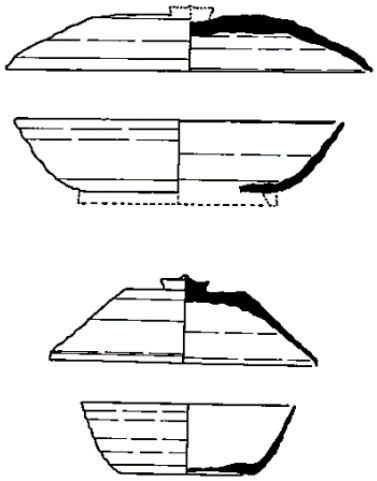
■塚野目第一号墳で出土した円筒・朝顔形埴輪

■塚野目古墳群から出土した石製模造品

中通り地域最大の古墳となっている。4号墳（錦木塚古墳：桑折町）は7世紀初頭に築かれた前方後円墳で、遺体を安置する石室には国見石（凝灰岩）が使用されている。古墳の規模や優れた副葬品などによって、塚野目古墳群が、県北地域の有力な首長が代々葬られていた墓域だったことを知ることができる。このほかにも、後期の古墳群として森山古墳群や大木戸古墳群が知られ、森山古墳群では石室を見学することができる。

■森山第四号墳の横穴式石室

大化の改新（645）から7世紀末にかけて律令国家を目指した体制整備が行われ、奈良時代には国見地域は陸奥国信夫郡に属し、伊達郷として把握されていた。国への納税は郡衙（ぐんが）（郡役所）の仕事となり、地方の有力者が役人となり、取り仕切っていた。税品目の中心は米と布で、米については班田収受法による徴収が実施され、班田農民には一定の法則による地割（条里制）された水田が班給された。国見町には圃（ほ）場整備前の昭和50年頃まで条里制の痕跡がよく残っており、発掘調査によって10世紀以前からの痕跡であったことが確かめられている。また、役所の指導で鉄製品や須恵器作りが行われたことを、山居製鉄遺跡（大字高城）や大木戸窯跡群（大字大木戸）によって知ることができる。



■大木戸窯跡群から出土した須恵器（蓋・杯）

阿武隈川に近い徳江地区に所在する徳江廃寺跡は、伊達郷の人々に新しい時代の到来を認識付ける装置として、8世紀に建立された寺院と考えられる。出土した瓦には、陸奥国府多賀城跡・信夫郡衙付属寺院の腰浜廃寺跡・定額寺と推定される西原廃寺跡（福島市飯坂町）と同様のものが認められ、創建当初から長い間、重要な寺院として扱われていたことをうかがうことができる。

■徳江廃寺跡から出土した旋回花文軒丸瓦（せんかいかもんのきまるがわら）

【奥州合戦と阿津賀志山防塁】

平安時代末の文治５年(1189)には、奥州藤原氏(平泉藤原氏との呼称もあるが本計画では本表記を用いる)と源頼朝の軍勢による奥州合戦が東北全域で繰り広げられ、本町では阿津賀志山の戦いがおこった。

文治５年（1189）７月源頼朝は28万４千騎といわれる軍勢を、頼朝率いる「大手軍」、太平洋沿岸を進む「東海道軍」、日本海側から攻め込む「北陸道軍」の３隊に分け、奥州藤原氏の本拠地である平泉に向けて進撃を開始した。大手軍は白河の関を越え、８月７日伊達郡の藤田宿へ着陣した。

文治３年(1187)に藤原秀衡(ひでひら)が亡くなった後、その跡をついだ泰衡(やすひら)は、文治５年(1189)閏(うるう)４月に源頼朝の弟義経を衣川の館にて自刃させており、恭順の態度を示していた。

その一方で、同年２月９日の頼朝の大動員以降、この事態を察知していた泰衡は、鎌倉軍の侵攻を阻止すべく、阿津賀志山に堅固な防御陣地を築き、迎撃の態勢をとった。この遺構が阿津賀志山防塁であり、堀と土塁が現在も一部残っている。『吾妻鏡』(1300年前後の編纂(へんさん))には*「阿津賀志山に城壁を築き要害を固む、国見の宿と彼の山との中間に、俄に口五丈の堀を構え、逢隈河の流れを堰入れ柵とし、異母兄西木戸太郎国衡を以て大将軍と為す(原漢文)」*と記載がある。

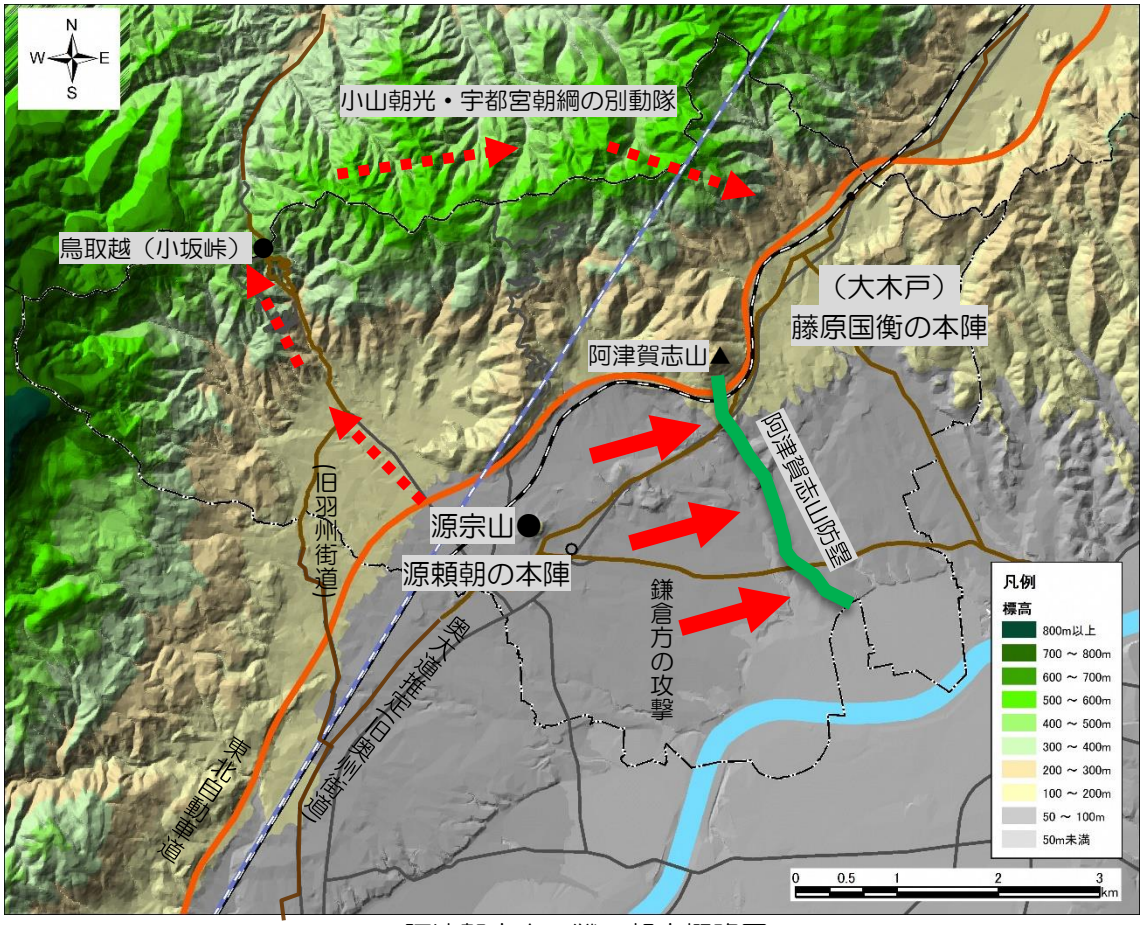
■阿津賀志山防塁
阿津賀志山防塁から東を望む。現代においても、土塁と空堀が原型をとどめている。日本三大防塁の一つ。

阿津賀志山防塁は、阿津賀志山の中腹からほぼ滑川に沿って、当時の阿武隈川岸に達する約3.2kmにわたって構築されていた。この防塁の構築に要した人夫は、延べ人数で約25万人と見積られている。

『吾妻鏡』によれば阿津賀志山の戦いは源頼朝が着陣した８月７日から４日間続き、鎌倉軍がこれを制した。鎌倉軍の別動隊が大きく迂回して奥州軍の後陣を奇襲したため、奥州軍は混乱をきたし、態勢を立て直せないまま敗北を喫した。

阿津賀志山の戦いの総大将であった藤原国衡(くにひら)は和田義盛・畠山重忠らに討ち取られた。その後泰衡は、夷狄嶋(えぞがしま)（北海道）に向けて逃亡したが、途中で家臣

に殺害されて奥州藤原氏は滅亡した。これにより藤原氏の奥州支配は終わりを告げた。



■阿津賀志山の戦い想定概略図

※「国土地理院基盤地図情報（数値標高モデル 10m メッシュ）」より作成。

【阿津賀志山の戦いの詳細】

阿津賀志山防塁を中心に展開した阿津賀志山の戦いは、源頼朝が率いる鎌倉方と大将軍藤原国衡（くにひら）が指揮する平泉方の双方数万の軍勢が対峙した、奥州合戦最大の激戦地となった。本町を主戦場とする戦闘が４日間にわたり続き、『吾妻鏡』の記述内容や全町的に分布する関連遺跡・伝承地から、合戦がダイナミックに展開したことがうかがえる。

阿津賀志山の合戦のながれ（『吾妻鏡』文治５年（1189）の記述より）

地名　・・・町内の地名

７月１９日　　源頼朝が鎌倉を出陣。奥州藤原氏は、阿津賀志山に防塁を築いて待ち構える。

「二品(源頼朝)の発向(出陣)のことを聞き、……阿津賀志山に城壁を築き要害を固め、国見宿と彼の山との間に、俄かに口五丈の堀を構えて、逢隈河(あぐくまかわ)の流れを堰入れて柵とした※　(現代語訳)」

７月２９日　源頼朝が白河関を越える。(大きな戦闘はなかった)

「秋風に草木の露を払(はらわ)せて　君が越(こゆ)れば関守も無し」(梶原景季)

８月　７日　源頼朝率いる鎌倉方の軍勢、国見駅（現在の国見町藤田と推定）に到着。

深夜に鎌倉方畠山重忠の部隊が防塁突破のための橋頭堡(進撃路)を築く。

「(畠山)重忠は率いてきた人夫八十人を召し、用意していた鋤・鍬で土砂を運ばせ、かの堀を塞いだので、まったく人馬の障害がなかった。(重忠の)思慮はまったく神に通ずるものである。(現代語訳)」

８月　８日　阿津賀志山防塁を守る平泉方の金剛別当秀綱と鎌倉方の畠山重忠・小山朝光・加藤景廉・工藤行光・工藤祐光らにより戦闘が開始。攻防の末、秀綱の陣が攻められ、阿津賀志山防塁は破られる。

同日には南に25㎞の石那坂でも合戦が行われ、平泉方の信夫庄司佐藤基治らが中村入道念西(伊達朝宗)らに敗れる。

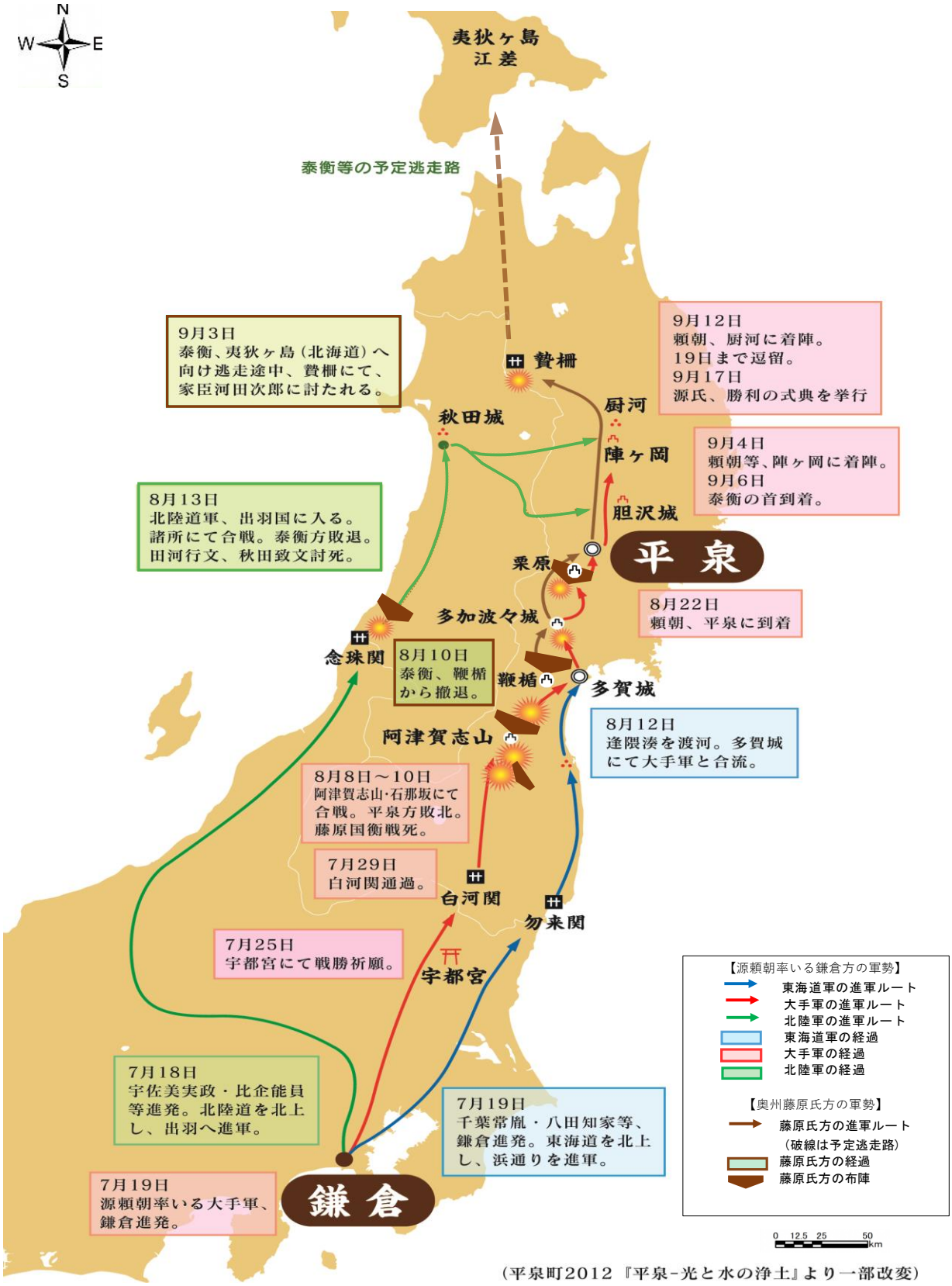
８月　９日　藤原国衡の本陣(大木戸)にて小規模な戦闘(こう着状態)。

中村入道念西(伊達朝宗)らが石那坂の合戦にて打ち取った信夫庄司佐藤一族の首を、経ヶ岡にてさらす。

８月１０日　藤原国衡の本陣での激戦。鎌倉方の奇襲により国衡敗走。

「(鎌倉方７人の武将が)伊達郡藤田宿より会津の方に向かって土湯の嵩、鳥取越などを越え、大木戸の上にある国衡の後陣の山によじ登ると、時の声をあげて矢を放った(現代語訳)」

※この記述は、位置や堀の規模から阿津賀志山防塁を指す記述であるが、阿武隈川の流れを堰入れる点は異なる。これは、同水系の小河川(滑川(なめりかわ))の流域と河岸段丘を利用して構築された防塁の様子を表している可能性がある。



（平泉町2012『平泉-光と水の浄土』より一部改変）

■源頼朝率いる鎌倉方の進軍ルートと経過

③中世

東北における中世は、奥州合戦（1189）から豊臣秀吉による奥州仕置（1590）までの約400年を指す。奥州藤原氏の滅亡後、頼朝は多くの有力御家人を地頭職に任命し、郡庄の実効支配を行わせた。奥州合戦に戦功のあった中村入道念西（伊達朝宗）の一族も、伊達郡を与えられ常陸国から移住し、地頭として領地経営を行った。伊達氏の居城は、伊達市梁川町・桑折町等を転々としながら支配と領地拡大に務めていくこととなる。

豊かな湧水があった光明寺・森山・泉田・内谷地区などでは、水路やため池などの灌漑（かんがい）施設が整備され、生産力の基盤が強化されていった。また光明寺地区では、伊達五山の一つとして「光明寺」が建立されるなど、伊達氏の庇護のもと寺院の整備がなされた。

以後も多少の変動があったものの、伊達氏の支配が続いていたが、天文の乱（1542～1548年）など伊達家内部や領主間の争いが続き、伊達氏は本拠地を伊達郡から米沢へ移すこととなる。

伊達輝宗、伊達政宗の時期になると、相馬氏との抗争が絶えず、宮城県伊具地方がその戦場となった。米沢方面に通じる小坂峠と、奥州街道の分岐点を擁し、さらには伊具方面にも連絡できる本町域は、交通上・軍事上の重要性を増していった。天正17年（1589）政宗は、相馬氏との抗争に勝利し、福島県会津地方の蘆名（あしな）氏を大敗させ、南奥羽の覇権を確立したが、天正18年（1590）、豊臣政権による「奥州仕置」が実施され、中世の終焉を迎える。

④近世

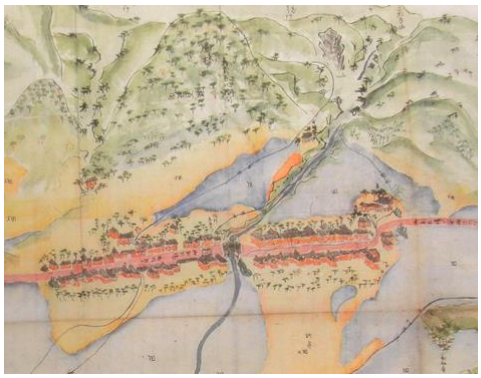
江戸時代は、徳川将軍家が日本を統治していた。この時代の統治機構は、江戸幕府あるいは徳川幕府と呼ばれた。初代将軍徳川家康は、政局の混乱を収め、産業教育の振興その他の施策に力を入れた。そのため260年以上続く幕府の基盤が確立し、平和な状態が続いた時代であった。

■西大枝深山神社廻米絵馬

豊臣秀吉の「奥州仕置」の結果、伊達郡は新しい領主蒲生氏郷の所領として編入された。その後、慶長３年（1598）に上杉景勝へと領主が

変わり、検地や街道・宿場の整備が進められる。寛文４年（1664）に幕府直轄領（天領）となり、伊奈半左衛門・国領半兵衛などの代官による支配を受けることになる。その後本町では、本多家（福島藩）・松平家（桑折藩・篠塚藩）・佐渡奉行（幕府領）・仙台藩預り・木下家（足守藩）などと領主が変遷し、幕府領として幕末を迎える。

江戸時代の本町では、２つの街道と阿武隈川の舟運による物流の活況や半田銀山の操業、養蚕業の勃興、西根堰の開削による農業の伸長により発展する。しかし、伊達郡一円支配から領域が村ごとに細分化され、天明年間（1781～1789）の大飢饉（ききん）などにより農民層の分化が進む。また、寛延２年（1749）の農民一揆や慶応２年（1866）の世直し一揆など大規模な騒動により、幕藩体制は大きく揺らぐ事件も発生した。



■元禄 11 年(1698)貝田村絵図
(県庁文書 1983「若松城地関係其ノ他」より)
※福島県歴史資料館寄託

■天保年間(1830～1844)
藤田村絵図

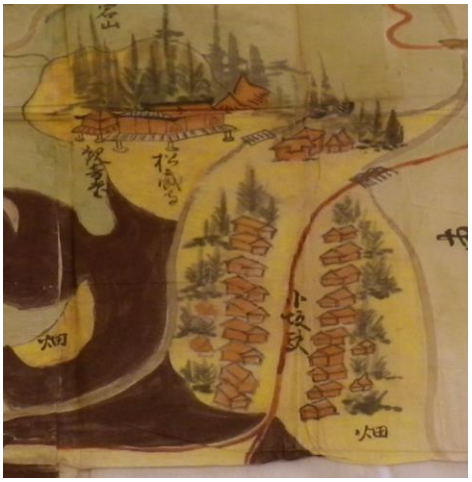
【街道・宿の成立】

江戸時代の幹線道路である奥州街道は、江戸から陸奥三厩（むつみんまや）（青森県）まで続き、陸奥国・松前藩などの諸大名の参勤交代の主要街道として、宿場町の整備が行われた。

伊達・信夫両郡には12の宿駅が置かれた。主要宿駅には本陣・脇本陣が設置され、名主・組頭・百姓代の村役人のほか、宿役人として年寄・検断・問屋が置かれた。奥州街道を江戸方面へ通るのは松前・八戸南部・盛岡南部・一関田村・仙台伊達の諸大名であり、桑折宿において、七ヶ宿を通る出羽・津軽の大名十三家がこれと合流する。

本町には、奥州街道貝田宿・藤田宿、羽州街道小坂宿があった。

藤田宿は、大名や公用役人の宿泊は少なく、一般



■小坂村絵図（江戸時代後期）
(「小坂区有文書」より)
※福島県歴史資料館寄託

の庶民や公用ではない武士が宿泊する旅籠が並び立ち、商人・農民の憩いの場所でもあった。享和４年（1804）頃には、藤田宿の旅籠・揚屋には多くの飯盛女を抱え、桑折宿や近郷からの者が投宿したと考えられている。

明治10年（1877）頃には、旅籠16戸、料理屋11戸があり、大いににぎわい、毎月１の付く日と６の付く日に市が立った(六斎市)。

貝田宿と小坂宿は、ともに峠を隔てて仙台藩領に接する境界の宿であったことから、小規模な宿場であるものの口留番所が置かれ、取り締まりが行われていた。口留番所付近の道は鍵型に折れ曲がり、町尻に寺院が整備されるなどの特徴を持つ。小坂宿では、小坂峠を背後に持つことから、旅人の旅籠や険しい峠道を登るための牛宿などが軒を並べ、参勤交代の大名たちも休息に用いた。

■昭和９年(1934)頃の旧小坂宿の町並み

⑤近代

明治維新後の本町は中村藩民政取締桑折県・南部白石藩の支配となるが、廃藩置県によって福島県の管轄となる。

近代国家が成立する過程にあって、本町においても目まぐるしいまでの制度変化に、住民は大きな戸惑いを感じていたと考えられる。まず明治４年から９年(1871～1876)頃までに地租の改正が行われた。それぞれの村で実測調査が行われ、さながら明治の総検地といった状況であった。

明治22年（1889）市制・町村制の施行により小坂村・藤田村・森江野村・大木戸村・大枝村が成立した。これに伴って村議会議員が選出され村議会が誕生した。一方で、実際の国見町の農村部の生活は、明治20年代の小作地率が35％超に達していることから、この時点で小作化が相当進んでいたと思われる。その後、大正５年（1916）までさらに小作化が進んでいる。

■表　国見町小作地率表（『国見町史』より）

年代	自作地	小作地	小作地率
明治26年(1893)	7,799反	4,307反	35.6%
明治35年(1902)	8,792反	5,963反	40.4%
明治43年(1910)	9,167反	6,159反	40.1%
大正5年(1916)	8,912反	7,218反	44.7%

※明治 30 年代は開墾が進んだ時期であるのを勘案すると、小作地率自体が変わらないように見えるが、実態は小作地自体が多くなっており、小作化が進んでいる。

【石蔵の普及】

本町には、「国見石」と呼ばれる凝灰岩が広範囲に分布・露出し、古くから採石を行ってきた。これらは、石工により加工され様々な用途で使用された。大正から昭和初期に、豪農・豪商による石蔵建築材として使用されたが、戦後、昭和30～40年（1960～1970）に採石が盛んに行われ、石蔵が一般にまで普及して町内の全域で建築されるようになった。現在も町内には多種多様な石蔵が多く残る。

■松田平治家住宅石蔵(左)

【豪商の誕生（奥山家）】

明治期に本町において豪商が生まれた。藤田の宿場で初代奥山忠左衛門は奥山呉服店を創業、東京から仕入れた呉服類を手広く販売、売り上げを伸ばした。明治４年（1871）１月の藤田村内売上では第２位の実績を残している。２代目忠左衛門は呉服店をさらに拡張、同時に農地を広く取得し、金融業も始めた。３代目忠左衛門は、土地の取得を更に拡大、同時に貸家業を始めた。また、奥山合名会社を設立し、金融業を更に拡大、北海道の胆振(いぶり)地方鵡川(むかわ)村(現：勇払(ゆうふつ)郡むかわ町)の山林を買収する。さらに日本鉄道会社藤田駅（現：JR東日本東北本線藤田駅）と第百七銀行藤田支店の誘致に尽力するなど、奥山家は３代目で隆盛を極めた。

■奥山家住宅

⑥現代

農村地域を形成する本町にとって、戦後の農地改革は重要な出来事であった。戦前の地主的土地所有制は解体され、自作農を主体とする農業へと変革されていった。各町村は、戦前の農業会にかわる農業協同組合を設立して、農地改革の成果を維持・発展させていった。さらに、農家は戦後日本の経済復興とその成長に対応するために、二・三男の都市部への移住や兼業化を進めることによって、その所得を増大させるとともに、果樹経営や野菜の栽培に力を注いだため、やがて本町は、これまでの米と養蚕に加え、果樹と野菜を供給する近郊農業の町へと変貌を遂げた。

昭和28年（1953）９月には、町村合併のモデル地区として県の指定を受け、翌29年（1954）、県下にさきがけて、藤田町・小坂村・森江野村・大木戸村・大枝村の１町４か村が合併して国見町が誕生した。昭和30年代の高度成長期には、新国道４号が開通し、仙台・福島間の東北本線電化が完了した。農業では、農業基本法が制定され、構造改革事業が進められ、本町では水稲・養蚕・果樹を基幹作物と定めた。

昭和40年代に入ると、小坂峠自動車道（主要地方道白石国見線）が開通し、公立藤田総合病院が完成した。昭和50年代には東北自動車道・東北新幹線の開通を迎え、さらに、国見インターチェンジの開設により、首都圏との時間的距離が著しく短縮され、経済交流の活発化、特に農産物などの流通拡大が期待された。

■昭和 36 年(1961)頃の国道４号整備工事
左の建物は当時の町役場。奥は阿津賀志山

■昭和 30 年代の藤田商店街(七夕まつり)

■奥州合戦八百年祭の一コマ

平成元年(1989)には、奥州合戦から約800年を記念して、奥州合戦八百年祭として「義経まつり武者行列」など全町的な催しが行われた。

平成６年(1994)にはコンサートホールや図書館機能を持つ複合施設として国見町観月台文化センターが開館し、現在に至るまで町内の文化芸術の拠点として町民に親しまれている。

平成23年（2011）３月11日、三陸沖を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は、地震の規模を示すマグニチュードは9.0を記録し、当町は最大震度６強を記録し、大きな被害が出た。全壊や半壊した家屋も多く、公共施設では、国見町役場庁舎が使用不能となり、役場機能は観月台文化センターに移転を余儀なくされた。その後、福島第一原子力発電所事故の放射能漏れにより、生活不安と風評被害や、農作物にも大きな被害をもたらした。

東日本大震災、原発事故からの復旧・再生のシンボルとして、平成29年（2017）には道の駅国見あつかしの郷が誕生した。町の産業・観光・歴史・文化の活性化の拠点として整備され、現代版の宿駅として町内外の新たな交流を生み出している。

■国見町観月台文化センター

■東日本大震災時に避難所となった
観月台文化センターの体育館

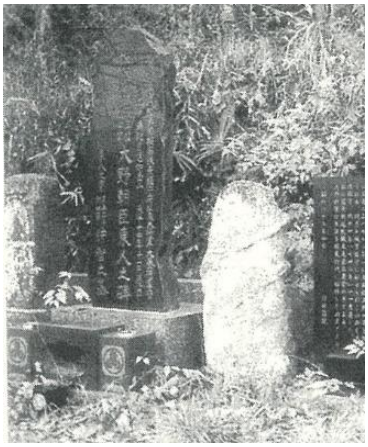
■道の駅国見あつかしの郷

（２）国見町に関わる主な人物

１）大野（おおの）　東人（のあづまびと）（奈良時代？～742年頃）貴族

奈良時代の貴族。壬申の乱で活躍した果安（はたやす）の子、和銅７年（714）迎新羅使（げいしらぎし）として初めて記録に登場する。神亀元年（724）、陸奥国に多賀城を築く。国見町鹿島神社の縁起によると、*「奈良のころ陸奥の国の蝦夷（えみし）征伐のため東征を行い、守護神として常陸鹿島明神を勧請し藤田宿に来る。当時阿津賀志山周辺の蝦夷人に対し藤田源宗山にて舘を築き蝦夷攻略の本拠とした。」*とある（昭和45年（1970）『鹿島神社記』）。

天平12年（740）に都に戻り、翌年平城京留守役に任命されるが、天平14年（742）に没する。



■町内に建立された
大野東人之碑（鹿島神社）

２）藤原泰衡（ふじわらのやすひら）（1155年もしくは1165年～1189年）
武将

奥州藤原氏、３代秀衡（ひでひら）の子。異母兄に国衡（くにひら）。

源頼朝からの要請に屈し、平泉に逃れていた義経を、自害へと追い込む。その後頼朝が、「奥州征伐」の兵を起こすと、阿津賀志山から阿武隈川に至る全長約3.2kmの防塁を築き、頼朝軍を迎え撃ったが４日間の戦闘で陥落した。泰衡は国分原鞭楯（こくぶがはらむちたて）の本陣（現：仙台市）を退き、以後散発的な戦闘を行うが、平泉を放棄し、現在の秋田県大館市付近まで敗走の後、家臣の裏切りに遭い殺害される。

■藤原泰衡（右側）
（源義経公東下り絵巻
「平泉入り」より）
※中尊寺所蔵・許可

３）源（みなもと）　義経（よしつね）（1159年～1189年）　武将

源頼朝の異母弟。平泉の藤原秀衡を頼り金売り吉次とともに本町をとおり、義経の腰掛松で休んだと伝承が残る。また、治承４年（1180）に源頼朝が平家討伐の挙兵したことを受けて本町を再び通り、硯石山付近で軍勢を整えた際に弁慶（べんけい）が頂上で記録を取るために使ったと語り伝えられる石が存在する。

■源九郎判官義経像
（観月台公園内に所在）

その後、寿永４年(1185)の壇ノ浦の戦いまで英雄的な活躍を重ねるが、源頼朝の追討を受け、平泉に逃亡する。文治５年(1189)閏(うるう)４月30日に、藤原泰衡に攻められ自害する。

４）　中村入道念西(伊達朝宗(だてともむね))

（？～1199 年）武将

『吾妻鏡』によれば文治５年(1189年)の奥州合戦に際して石那坂の戦い（福島市）で息子の為宗(ためむね)・為重(ためしげ)・資綱(すけつな)・為家(ためいえ)と共に奥州藤原氏の配下佐藤庄司を討ち取り、武功を立てた。

これにより、源頼朝より伊達郡を賜る。朝宗は、これまでの伊佐、或いは中村の姓を改め、以後伊達を称することになった。これが伊達氏の始まりとなる。

■中村入道念西(伊達朝宗)
※仙台市博物館所蔵・許可

５）松尾芭蕉（1644年～1694年）俳人

元禄２年(1689)３月に弟子の曾良(そら)を伴い、『おくのほそ道』の旅に出る。同年６月７日に白河の関より陸奥国に入り、本町には同月19日に到着。

国見峠を越えて直轄地や譜代大名の領地であった現在の福島県域から宮城県域（外様大名仙台伊達藩）へ入ることは、本格的な「みちのく入り」の感を持ったことだろう。

■松尾芭蕉と曾良
(米倉兌作「奥の細道 伊達の大木戸」より)　※伊達市教育委員会所蔵・許可

『おくのほそ道』（元禄15年（1702）刊行）には、「*羇旅辺土(きりょへんど)の行脚、捨身無常(しゃしんむじょう)の観念、道路にしなん、是天の命なりと、気力聊(いささか)とり直し、路縦横(みち)に踏で伊達の大木戸をこす*」と記されている。

６）奥山忠左衛門（３代目）（1859年～1929年）
豪商・政治家

旧梁川村（現伊達市）にて生まれる。明治10年（1877）に２代目奥山忠左衛門の養子となり一人娘イシと結婚する。奥山家は代々呉服屋や貸地業を営んでいたが、３代目より貸家業、金融業など事業を拡大、県下有数の豪商となる。

大正10年（1921）には旧藤田宿の中心にある自宅敷地に純和風の主屋と荘厳な洋館を建築した。その間、県会議員や藤田町長などを歴任、藤田駅の誘致や銀行の建設に奔走し、本町の近代化・発展に尽くした。

■奥山忠左衛門(３代目)

７）菅野喜三郎（1873年～1958年）政治家

旧小坂村内谷の床屋の末子で内谷村の村長を務めた父末吉と、五十沢村の旧家から嫁いできた母トラの長男として明治６年（1873）８月22日に生まれた。

日清、日露戦争ともに仙台歩兵第４連隊で後方勤務。復員後は小坂村村会議員、内谷区長、村助役、伊達郡会議員、公立福島病院議員を歴任、大正12年（1923）９月に県会議員となる。また、名誉職参事補充員に選任される。地元の養蚕業の振興に生涯をささげた。

■菅野喜三郎

８）伊藤柳太郎（1877年～1949年）石工職人

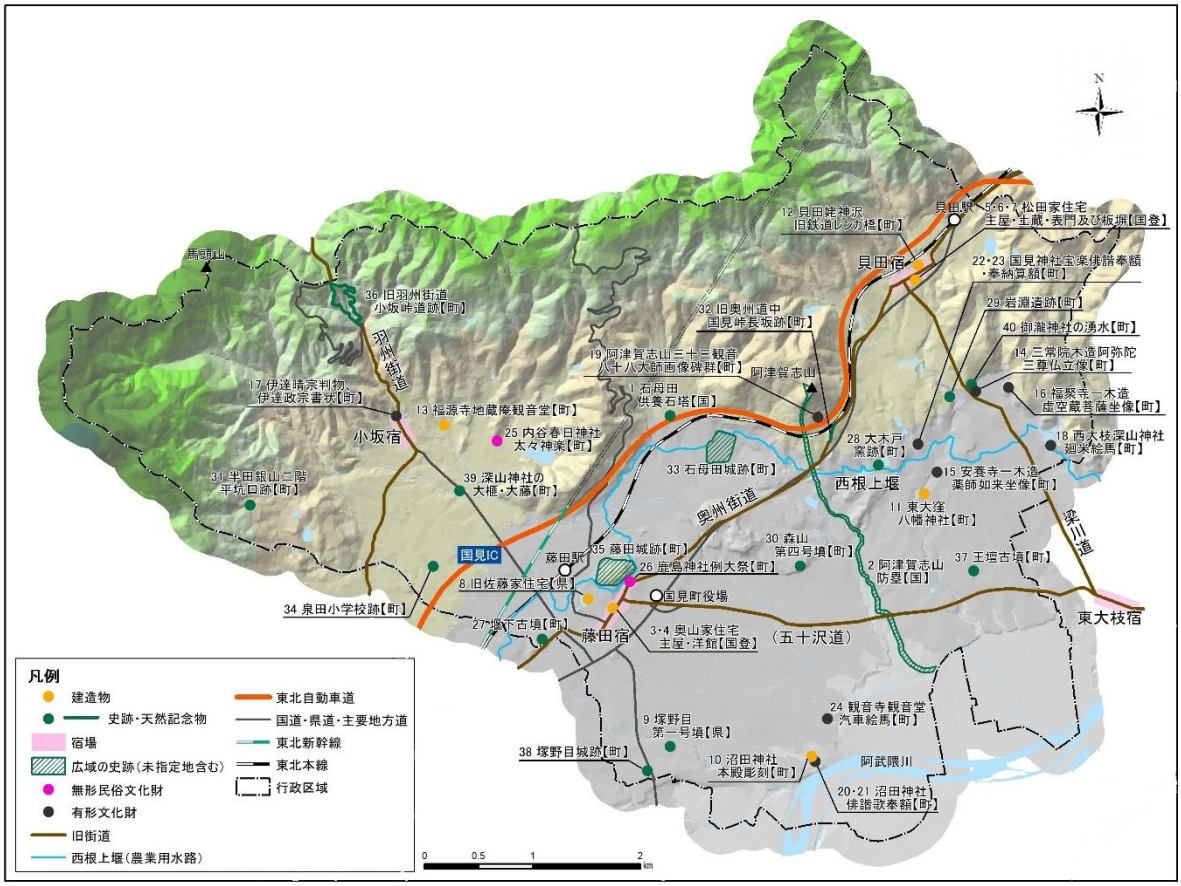
旧藤田村石工職人中野政造の次男として生まれる。幼い頃から石工職人の父の手伝いをして石工技術を身につける。成人すると大工の家柄である伊藤家に養子として入り、大工技術を習得する。その後、栃木県宇都宮市大谷の石工から最新の技術を学んだ。

大正６年（1917）には、旧森江野村の自宅敷地に本町内で国見石を使用した第１号となる石蔵を建築し、石蔵建築の先駆となる。今なお町内には国見石使用の蔵が多数ある。

■伊藤柳太郎

４．文化財の分布状況

国見町には、史跡２件、登録有形文化財（建造物）５件、県重要文化財(建造物)１件、県指定史跡１件、そのほか町指定文化財31件が所在している。



■国見町内指定文化財の分布状況

※「国土地理院基盤地図情報（数値標高モデル 10mメッシュ）」より作成。

【文化財種別件数表】

種類		国		県		町	
		指定	登録	指定	登録	指定	登録
有形文化財	建造物		5	1		4	
	工芸品					3	
	古文書					1	
民俗文化財	有形の民俗文化財					7	
	無形の民俗文化財					2	
記念物	遺跡	2		1		12	
	動物、植物、地質鉱物					2	
合計		2	5	2	0	31	0

■国見町内指定文化財一覧

指定別	No.	指　定	指定登録日	名称	所在地
国指定	1	史跡	S.10.6.7	石母田供養石塔	石母田字中ノ内
	2	史跡	S.56.3.14	阿津賀志山防塁	大木戸、石母田、西大枝
国登録	3	登録有形文化財（建造物）	H.10.4.21	奥山家住宅主屋	藤田字北
	4	登録有形文化財（建造物）	H.10.4.21	奥山家住宅洋館	藤田字北
	5	登録有形文化財（建造物）	R.4.10.31	松田家住宅主屋	貝田字町裏
	6	登録有形文化財（建造物）	R.4.10.31	松田家住宅土蔵	貝田字町裏
	7	登録有形文化財（建造物）	R.4.10.31	松田家住宅表門及び板塀	貝田字町裏
県指定	8	重要文化財（建造物）	S.47.4.7	旧佐藤家住宅	藤田字観月台
	9	史跡	S.59.3.23	塚野目第一号墳	塚野目字前畑
町指定	10	有形文化財（建造物）	S.58.3.3	沼田神社本殿彫刻	徳江字沼田
	11	有形文化財（建造物）	H.5.10.1	東大窪八幡神社	高城字前
	12	有形文化財（建造物）	H.25.10.30	貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋	貝田字寺脇
	13	有形文化財（建造物）	H30.3.13	福源寺地蔵庵観音堂	鳥取字鳥取
	14	有形文化財（美術工芸品）	S.60.3.15	三常院木造阿弥陀三尊仏立像	光明寺字鹿野
	15	有形文化財（美術工芸品）	H.5.10.1	安養寺一木造薬師如来坐像	高城字北
	16	有形文化財（美術工芸品）	H.5.10.1	福聚寺一木造虚空蔵菩薩坐像	光明寺字沼
	17	有形文化財（古文書）	S.60.3.15	伊達晴宗判物、 伊達政宗書状	小坂字小坂
	18	有形民俗文化財	S.58.3.3	西大枝深山神社の廻米絵馬	西大枝字宮ノ内
	19	有形民俗文化財	S.44.6.30	阿津賀志山三十三観音 八十八大師画像碑群	大木戸字阿津賀志山

	20	有形民俗文化財	H.5.10.1	沼田神社再建遷宮祝 排諧歌奉額	徳江字沼田
	21	有形民俗文化財	H.5.10.1	沼田神社南藤堂武俊 七十齢賀寿俳諧歌奉額	徳江字沼田
	22	有形民俗文化財	H.5.10.1	国見神社宝楽俳諧奉額	高城字国見
	23	有形民俗文化財	H.5.10.1	国見神社奉納算額	高城字国見
	24	有形民俗文化財	H.5.10.1	観音寺観音堂汽車絵馬	徳江字団扇
	25	無形民俗文化財	S.60.3.15	内谷春日神社太々神楽	内谷字舘脇
	26	無形民俗文化財	H.26.12.15	鹿島神社例大祭	藤田字北
	27	史跡	S.48.3.10	堰下古墳	泉田字堰下
	28	史跡	S.48.3.10	大木戸窯跡	大木戸字中野窪
	29	史跡	S.51.2.26	岩淵遺跡	高城字岩渕
	30	史跡	S.60.3.15	森山第四号墳	森山字上野薬師
	31	史跡	S.60.3.15	半田銀山二階平坑口跡	泉田字二階平
	32	史跡	S.60.3.15	旧奥州道中国見峠長坂跡	大木戸字長坂
	33	史跡	S.60.3.15	石母田城跡	石母田字舘ノ内
	34	史跡	H.5.10.1	泉田小学校跡	泉田字立町
	35	史跡	H.5.10.1	藤田城跡	山崎字宮舘
	36	史跡	H.5.10.1	旧羽州街道小坂峠道跡	鳥取字峠下
	37	史跡	H.5.10.1	王壇古墳	西大枝字王壇
	38	史跡	H.25.10.30	塚野目城跡	塚野目字舘前
	39	天然記念物	S.49.3.1	深山神社の大榧大藤	鳥取字深山
	40	天然記念物	H.5.10.1	御瀧神社の湧水	光明寺字滝沢

（１）国指定等文化財

史跡は、石母田供養石塔と阿津賀志山防塁の２件、登録有形文化財（建造物）は、奥山家住宅主屋・洋館と松田家住宅主屋・土蔵・表門及び板塀の５件である。

■石母田供養石塔（史跡）

徳治３年(1308）に僧智瑄(そうちせん)が、先祖の追善供養に建立した板碑で、梵字(ぼんじ)と功徳文が刻まれている。銘文は元(げん)(当時の中国大陸の王朝)の帰化僧一山一寧(いっさんいちねい)の筆跡で、鎌倉時代における禅密合一の思想を表現した特異なものであることから、昭和10年(1935)に国の史跡に指定される。地元では俗に「蒙古の碑」と呼ばれ、周辺は満福寺跡といわれている。

福島市瀬上の台厳寺には、享和３年(1803)に作られた同碑模刻(木の複製品)が伝わるなど、古くから貴重な文化遺産として認識され守られてきた。

■石母田供養石塔

■阿津賀志山防塁（史跡）

東北を支配した奥州藤原氏と源頼朝率いる鎌倉軍が対峙した、文治５年（1189）阿津賀志山の合戦の古戦場跡。東北全域で展開された奥州合戦における最大の激戦地となり、奥州藤原氏により阿津賀志山中腹から、阿武隈川の旧氾濫原まで約3.2kmにわたり築かれた堀と土塁からなる要塞施設。地元では二重堀(ふたえぼり)と呼ばれ、守られてきた。

■阿津賀志山防塁

■奥山家住宅主屋・洋館（登録有形文化財）

大正10年（1921）に和館・洋館からなる迎賓館として建設された。建物の後方に千俵蔵など大小合わせて５つの蔵が、主屋を取り囲むように配置されていた。洋館は木骨石造で、壁材に国見石が用いられ、表面はタイル貼りとなり、八角形の塔を備えた特徴的な建物である。

■奥山家住宅主屋・洋館

■松田家住宅主屋・土蔵・表門及び板塀
（登録有形文化財）

奥州街道の旧貝田宿に位置する大型養蚕住宅。街道側を入母屋造として家の構えとし、反対側を切妻造で棟に煙出しを設け、養蚕のための造りとする。明治43年(1910)の大火後に移築と伝わる。軒裏まで漆喰で塗込め、雨戸や戸袋を鉄板張とし、厳重に防火に備え、独特な外観を呈する。

土蔵は、明治24年(1891)に建設された、大火前からの建造物である。表門及び板塀は昭和初期に建設されたと推定される。

日舞の公演や現代芸術作家の絵画展など活用にも取り組む。

■松田家住宅主屋表門及び板塀

■松田家住宅土蔵

（２）県指定文化財

■旧佐藤家住宅（県指定重要文化財）

江戸時代中期のこの地方における本百姓の標準的な住居である。この建物は国見町大字小坂字木八丁にあったもので、昭和47年（1972）に現在地（大字藤田字観月台）に移転復原された。間取りは単純で、広い土間、大黒柱や曲木を用いた梁、三方大壁の手法や出入口の大戸など、古い建築様式が残されている。

■旧佐藤家住宅

■塚野目第一号墳（県指定史跡）

５世紀の中頃に築造された前方後円墳。昭和50年（1975）に発掘調査が行われ、主軸の長さ約70m、後円部の直径約52m、高さが６mで前方部が短い特徴を持つ。周りには、幅７～８m、深さ1.5mの溝が巡らされ、多量の円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。

■塚野目第一号墳

（３）主な町指定文化財

■沼田神社本殿彫刻（町指定有形文化財）

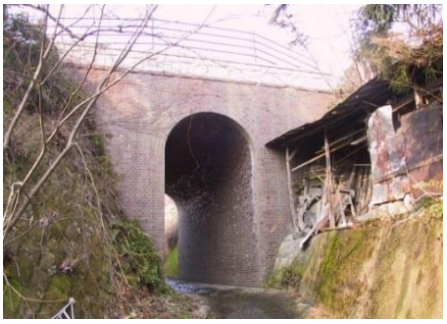
徳江の旧河岸跡近くにある沼田神社本殿の彫刻は、全面透かし彫りの見事な装飾が施されている。伝えによると、伊達郡高成田村仏師長谷川雲橋・雲谷親子が弘化年間（1844～1847年）頃に制作したものであるとされている。

■沼田神社本殿彫刻

■貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋（町指定有形文化財）

明治20年（1887）に開業した現在のJR東北本線（黒磯～塩釜間）当初の鉄道橋。排煙を原因とする大火災が地区でたびたび発生したため、大正年間に路線の変更が行われた。

東北の近代化を支え、貝田の町並みとも大きく関わる鉄道遺産である。



■貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋

■岩淵遺跡（町指定史跡）

岩淵遺跡は、高城にある縄文時代中期の集落跡。直径7.4mの平面円形状の竪穴式住居跡が確認され、内部には直径3.2mの大型複式炉が出土した。現在、竪穴式住居１棟が復元されている。

■岩淵遺跡

■旧奥州道中国見峠長坂跡（町指定史跡）

江戸時代の奥州道中における要衝の地にあって、険阻な山坂として著名な国見峠の難所跡が遺されている。多くの大名や旅人が往来し、松尾芭蕉も『おくのほそ道』で旅の辛さを記している。深緑の中に掘り割り状の道跡が約300m続く。

■旧奥州道中国見峠長坂跡

■旧羽州街道小坂峠道跡（町指定史跡）

小坂峠（標高441m）は国見町と宮城県白石市との境に位置し、近世において出羽国諸大名の参勤交代や御城米の輸送等に利用された街道跡である。旧道の東側には慶応２年（1866）に開削した新道がある。現在の小坂峠越えの道路は昭和47年（1972）に完成した主要地方道白石国見線である。

■旧羽州街道小坂峠跡

■深山神社の大榧（かや）大藤（町指定天然記念物）

昭和49年（1974）に町の天然記念物に指定。大榧は、根回り４m、枝の張り出しは15mもある大樹である。樹齢500年以上と考えられる大藤は、大榧全体に巻き付いており、５月初旬頃に藍色の藤の花が一斉に咲き、滝のような鮮やかさである。

■深山神社の大榧大藤

■御瀧神社の湧水（町指定天然記念物）

この湧水は、御瀧神社の境内に湧き出ており、古くから地域住民の憩いの場として親しまれている。また四季を通して水量が豊富で、地域の生活用水や水田の灌漑（かんがい）用水として広く利用されている。「福島の水三十選」に選ばれている。

■御瀧神社の湧水

（４）指定以外の文化財等

■阿津賀志山

阿津賀志山は、標高289mの町のシンボルとなる山で、毎年12月23日から「あつかし山ビッグツリー」と称して山頂にライトが灯される。（※山頂から山麓（さんろく）にかけての一部は、阿津賀志山防塁として史跡指定がされている。）

■阿津賀志山

■中尊寺蓮

中尊寺蓮は、藤原泰衡（やすひら）の首桶にあった蓮の種を現代に蘇らせたもので、源義経ゆかりの町として岩手県平泉町中尊寺より平成21年（2009）に株を譲り受けた。毎年７月頃になると、鮮やかなピンクの花があつかし千年公園にある蓮池の水面にいくつも現れる。

■中尊寺蓮

■中村入道念西（伊達朝宗（だてともむね））夫人墓※

文治５年（1189）奥州合戦の功績により伊達郡をあたえられた伊達氏初代当主朝宗の夫人の墓。周辺は、夫人の菩提寺（ぼだいじ）として存在した光明寺（伊達五山の一つ）を中心に整備され、伊達氏の庇護を受け栄えた。

■中村入道念西（伊達朝宗）夫人墓

※「伊達朝宗夫人墓」が一般的な呼称であるが、本計画では標記記載に統一している。

■西根上堰（うわぜき）

寛永10年（1633）に完成した全長約28kmの農業用水路。福島市（飯坂）・桑折町・国見町を経て伊達市梁川町五十沢に至り、当時の29カ村を潤した。工期は８年で、標高差わずか50ｍという高い土木水準で設計された。平成22年度には、土木学会選奨土木遺産に認定された。

■西根上堰

■最禅寺

天正16年（1588）または寛永３年（1626）に開山されたと伝わる曹洞宗の寺院である。現在の本堂は明和２年（1765）に造られた。本堂の中には本尊とともに、柿葺（こけらぶき）の小さな観音堂が安置され、今でも観音信仰が残っている。

■最禅寺本堂

（５）特産品

■米

本町は昔から米づくりが盛んで、阿武隈川流域の肥沃な粘質土壌から、８世紀頃には東北有数の条里制による水田が整備された。現在でも県下有数の種場（採種圃場）として、良質の種もみを生産している。作付されている品種は、コシヒカリが多い。秋の収穫時期になると稲穂が垂れた田園風景が一面に広がり、黄金色に輝く。

■桃

盆地特有の寒暖差が大きな気候は、国見特産の桃をおいしく育てる。今人気の「あかつき」は福島の果樹試験場（農業総合センター果樹研究所）で生まれ、とてもジューシーで果肉はやわらかく、香り高い風味を誇る。本町を代表する逸品となっている。

■あんぽ柿

一つ一つ丹念に皮を剥（む）き、独自の技術で乾燥させると甘み豊かな干し柿（あんぽ柿）ができる。本町では大粒の渋柿、蜂屋柿（はちやがき）がよく使われ、あめ色の果肉は、ゼリーのような食感で、自然の甘さは、大地と太陽の恵みを感じさせる絶品である。

■さくらんぼ

厳しい冬を越した果樹は、春一斉に花を咲かせる。そして、果物シーズンの幕開けを告げるのがさくらんぼである。本町は、山形県東根市より栽培方法を導入以来、さくらんぼの産地である。主力品種の「佐藤錦」は手間をかけ、雨風をさえぎり、丹念に生産している。大地の恵みと太陽の力をたっぷりと受け、独自の光沢を放ち「紅いルビー」と称される。